高松市埋蔵文化財調査報告　第233集
高松市埋蔵文化財センター活用事業紀要第2集

史集 高松

第2号

2022年 3 月

高松市教育委員会

例　言

1. 本書は、高松市埋蔵文化財センターが実施した公開活用事業の広報及び成果の公開を目的とした冊子である。特に講座等の成果については、文字化し成果を蓄積することで公開活用事業の成果をより広く活用することを目的として作成した。

2. 本書には令和３年２月から令和４年３月にかけて実施した埋蔵文化財公開活用事業の成果及び広報を収録した。図版等一部の成果物はCD付録にして収録している。なお、本書の成稿及び印刷に要する期間の関係で、一部については次年度に発行予定の次巻に掲載する予定である。

3. 本書の執筆分担は以下のとおり。
第１・２章：高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員　香川将慶
第３・４章：同課会計年度任用職員　織田比呂子
第５章第１節：大阪大谷大学教授　狭川真一
第５章第２節：香川大学名誉教授　田中健二
第５章第３節：公益財団法人元興寺文化財研究所　坂本俊
第６章第１節：香川将慶
第６章第２節：高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員　山元敏裕
第６章第３節：香川将慶
第６章第４節：同上
第６章第５節：同上
なお、編集は香川が担当した。

4. 以下の個人・機関に資料調査等で協力いただいた。記して謝意を示したい。

今井晃樹、大粟美菜、岡本治代、山下英郎、石井町教育委員会、徳島市考古資料館、奈良文化財研究所

目　次

第１章　講座・講演（令和３年４月～令和４年３月）……1
第１節　市政出前ふれあいトーク……1
第２節　連載講座『探求！たかまつ遺産』……2
第２章　展示……3
第１節　埋蔵文化財センターの常設展示……3
第２節　埋蔵文化財センターの企画展示……3
第３章　パンフレット……4
第４章　体験学習……5
第１節　体験学習講座……5
第２節　体験キット販売・動画配信……6
第５章　令和２年度連載講座の成果について……7
第１節　讃岐地域の中世お墓事情……7
第２節　高松城下町の形成・拡大と構造……19
第３節　分布調査からみた生駒山の石切丁場……26
第６章　活用事業の成果について……32
第１節　令和３年度事業の目的……32
第２節　寄贈資料の経緯……32
第３節　資料の概要……32
第４節　讃岐国分寺の東大寺式軒平瓦の特徴と出土傾向について……33
第５節　阿波国分寺跡・阿波国分尼寺跡の出土瓦について……41

第１章　講座・講演（令和３年４月～令和４年３月）

第１節　市政出前ふれあいトーク

高松市では、広く市民からの依頼を受けて市政に関する講座等を実施しています。高松市埋蔵文化財センターでは、市内の遺跡や史跡整備事業の成果等を中心に、依頼を受け付けています。

対象：市内に在住、又は通勤・通学されている方で、市政やまちづくりに関心のある 20 人程度の参加が見込める団体やグループ。
申込み方法：所定の申込書に希望するテーマ・日時などを記入して、実施希望日の２週間前までに提出
申込み・問い合わせ先：高松市役所１階市民相談コーナー（tel：087-839-2111　fax：087-839-2464）

令和２年度の文化財関係ふれあいトークの事例

番号	名　　称	主催者	参加者数	場　　所	月　日	主な内容	広報発信媒体	担当	事業分野
1	紫雲ふれあいウオーク2020	高松紫雲ライオンズクラブ	中止	峰山公園、芝生広場、石清尾山古墳群	4月5日	峰山公園よりウォーキング石清尾山古墳群の説明		高上 舩築	石清尾山
2	市政出前ふれあいトーク（二番丁地区の文化財）	日赤奉仕団二番丁分団	中止	二番丁コミュニティセンター	4月18日	二番丁地区周辺の文化財の紹介		山本	その他
3	文化財保護協会総会講演	文化財保護協会	中止		4月23日	令和2年度の文化財行政の動向（事業計画など）		山元	その他
4	NPO法人高松城の復元を進める市民の会理事会	NPO法人高松城の復元を進める市民の会	中止	丸亀町壱番街カルチャールーム	4月25日	桜御門の復元内容と工程について		大嶋	高松城
5	NPO法人高松城の復元を進める市民の会総会	NPO法人高松城の復元を進める市民の会	中止	高松城跡	5月30日	旭橋北側石垣修理で分かったこと		大嶋	高松城
6	令和2年度　埋蔵文化財保護行政担当者研修会	香川県庁北館3階303間集会室	30人	香川県教育委員会生涯学習・文化財課	9月4日	遺構・遺物の調査研究「勝賀城跡の発掘調査」		梶原	その他
7	石清尾山古墳群の歴史的価値と今後の展望	蓬莱歴史研究会（丸亀市生涯学習課）	30人	丸亀市生涯学習センター	9月15日	史跡石清尾山古墳群の説明		波多野	石清尾山
8	後期企画展・緑地帯屋外施設解説	太田郷土史誌研究会	10人	四番丁スクエア	9月23日	後期企画展・緑地帯屋外施設解説		佐藤	その他
9	高松城周辺の歴史講座	屋島コミュニティセンター	15人	高松城跡周辺	10月8日	高松城周辺の現地探訪		大嶋	高松城
10	史跡石清尾山古墳群について（トリムの祭典）	高松市ハイキング協会	中止	石清尾山古墳群	10月11日	史跡石清尾山古墳群の説明		佐藤	石清尾山
11	市政出前ふれあいトーク（鬼無地区の文化財）	鬼無コミュニティセンター	20人	鬼無コミュニティセンター	9月24日	鬼無地区の古墳の概要と出土遺物について		高上	その他
12	屋島　黒石の丁場について	屋島コミュニティセンター	21人	屋島コミュニティセンター	6月25日	屋島北嶺にある洞窟では黒石はどのように採掘されたか		梶原	屋島
13	市政出前ふれあいトーク（太田南地区の遺跡等）	太田郷土史誌研究会	8人	四番丁スクエア	9月23日	亀井戸、太田南地区内の遺跡、センター展示室解説		佐藤	その他
14	丸亀市文化財保護協会現地研修（屋嶋城跡・高松城跡・石清尾山古墳群）	丸亀市文化財保護協会	30人	屋嶋城跡・高松城跡・石清尾山古墳群現地	10月13日	屋嶋城跡・高松城跡・石清尾山古墳群での現地解説		香川	屋島
15	屋嶋城について	十河歴史研究会	6人	屋嶋城跡城門	10月21日	屋嶋城跡についての現地解説		山元	屋島
16	史跡石清尾山古墳群について	高松市国際交流協会	20人	峰山公園	11月1日	史跡石清尾山古墳群		高上	石清尾山
17	讃岐遍路道　一宮寺道　について	下笠居財産区	17人	根香寺～鬼無	11月12日	讃岐遍路道　一宮寺道　について		大嶋	その他
18	檀紙地域における文化財等	檀紙地区地域おこし運営委員会史跡部会	20人	檀紙コミュニティセンター	11月12日	檀紙地域の文化財		香川	その他
19	高松観光ボランティアガイド協会研修	高松観光ボランティアガイド協会	70人	玉藻公園披雲閣	11月19日	桜御門の概要と進捗状況		大嶋	高松城
20	石清尾山古墳群について	丸亀市生涯学習クラブ 丸亀古代史研究会	11人	石清山古墳群	11月25日	石清尾山古墳群 峰山地区、稲荷山地区案内		佐藤	石清尾山
21	高松城天守復元について	高松商工会議所	15人	高松商工会議所	1月12日	天守復元の現状と課題・桜御門の概要と進捗状況		大嶋	高松城
22	屋島の遺跡について 屋嶋城・屋島寺・源平合戦屋島の戦い	三豊市文化財保護協会	中止	屋島山上	1月29日	屋嶋城・屋島寺・源平合戦屋島の戦いについての解説		山元	屋島
23	高松市内の身近な遺跡	身体障害者福祉センターコスモス園	20人	身体障害者福祉センターコスモス園	2月4日	高松城周辺の身近な遺跡（屋島方面等）		高上	その他
24	香西（香西氏）の歴史と勝賀城	香西観光協会	32人	勝賀城跡	3月20日	香西（香西氏）の歴史と勝賀城		梶原	その他
25	プチ旅 高松市街地（商店街周辺案内）	高松観光コンベンションビューロー	10人	高松市街地 （商店街周辺）	3月20日	高松市街地（商店街周辺の遺構）		波多野	その他
26	プチ旅 高松市街地（商店街周辺案内）	高松観光コンベンションビューロー	5人	高松市街地 （商店街周辺）	3月27日	高松市街地（商店街周辺の遺構）		高上	その他
27	令和2年度香川県文化財専門研修	香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課	15人	高松城跡披雲閣	2月下旬から3月上旬	耐震対策補強工事現場公開と概要説明		高上	高松城

第２節　連載講座『探求！たかまつ遺産』

市民向け講座として、年間４回程度、各種専門家を招聘した連載講座を実施しています。

なお、令和２年度連載講座の発表内容については第５章を参照ください。令和３年度の発表内容は来年度に掲載します。

探求！たかまつ遺産第１回（令和３年 11 月 21 日）
「高松市内の陶棺」絹畠　歩（奈良県立橿原考古学研究所）

探求！たかまつ遺産第２回（令和３年 12 月 11 日）
「長崎の台場跡と長崎の鼻台場跡」田中　学（長崎市文化財課）

探求！たかまつ遺産第３回（令和４年１月 29 日）
「江戸時代初期の石切丁場について」橋詰　茂（元徳島文理大学文化財学科）

探求！たかまつ遺産第４回（令和４年３月６日）
「讃岐・阿波国分寺と古代寺院の造営について－寄贈資料を中心に－」香川　将慶（高松市文化財課）

第１回

第２回

第３回

第４回

連載講座の様子

連載講座のチラシ

第２章　展示

第１節　埋蔵文化財センターの常設展示

（１）常設展示・・・屋外緑地帯

①亀井戸跡　導水施設の移築・復元：初代高松藩主松平頼重が 17 世紀中頃に造らせたといわれている亀井戸。亀井戸の先進性や高松城下町の発達を後世に伝えるために導水施設を移築・復元展示しています。

②讃岐の水の恩人　西嶋八兵衛：讃岐国高松で水資源開発に力を尽くした西嶋八兵衛について紹介。

③人と水のかかわり：高松は昔から雨が少なく、人々は溜池をつくったり川を改修したりと、水の確保に大変な苦労を重ねてきました。古代から現代に至るまでの讃岐の人々と水にまつわる 14 のお話を展示。

観覧料金：無料　休館日・開館閉館時刻：屋外展示につき終日観覧可

第２節　埋蔵文化財センターの企画展示

（２）企画展示・・・本館２階展示室ほか市内展示施設

センター展示室では小・中学生をはじめ広く一般の方に向けた埋蔵文化財に関わる展示会を実施し、会期終了後は市内の展示施設を巡回しています。また、年間３回程度、他の展示施設で企画展を実施しています。

観覧料金：無料　休館日：土日祝日・12/29 ～ 1/3　開館時間：午前９時～午後５時

亀井戸から埋蔵文化財センターを望む（緑地帯）

人と水のかかわり（緑地帯）

讃岐の水の恩人　西嶋八兵衛（緑地帯）

【広域連携②さぬき市】中世の山城　雨滝城と勝賀城（展示室）

【後期展】伏石駅の下は・・・太田下・須川遺跡（展示室）

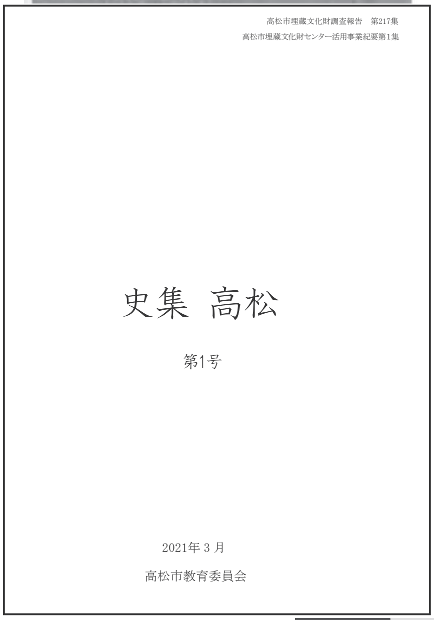
【後期展】まいぶんヤチョラー河内先生が行く！全国・蔵出し編（展示室）

令和３年度展示活動一覧（令和４年２月現在）

	名　　　称	場所	観覧者数	開催期間	主 な 内 容
1	【TakamatsuRemainsFile 刊行記念展】時時刻刻の高松	埋文センター	765 人	令和２年８月３日～令和３年４月９日	TakamatsuRemainsFile で扱った旧石器から江戸時代までの 13 遺跡を展示
2	【広域連携②】さぬき市×高松市　中世の山城雨滝城と勝賀城 / 高松の４大遺跡	埋文センター	193 人	４月 26 日～７月９日	瀬戸・高松広域連携中枢都市圏②雨滝城と勝賀城の比較展示 / 高松の４大遺跡の紹介・展示
3	【巡回展】TakamatsuRemainsFile 刊行記念展　時時刻刻の高松	讃岐国分寺跡資料館	229 人	４月 20 日～７月 11 日	TakamatsuRemainsFile で扱った旧石器から江戸時代までの 13 遺跡を展示
4	【後期展】伏石駅の下は・・・太田下・須川遺跡 / まいぶんヤチョラー河内先生が行く！高松・四国編	埋文センター	393 人	７月 26 日～ 12 月 10 日	琴電新駅の下に広がる弥生の集落を考察 / 埋文ヤチョラー河内先生の野帳を紹介（高松・四国）
5	【後期展】伏石駅の下は・・・太田下・須川遺跡 / まいぶんヤチョラー河内先生が行く！全国・蔵出し編	埋文センター	開催中	12 月 20 日～令和４年４月８日	琴電新駅の下に広がる弥生の集落を考察 / 埋文ヤチョラー河内先生の野帳を紹介（全国）
6	【巡回展】「高松の４大遺跡」	讃岐国分寺跡資料館	開催中	令和４年１月 18 日～３月 13 日	全国的に特に重要とされる高松を代表する４遺跡を紹介

第３章　パンフレット

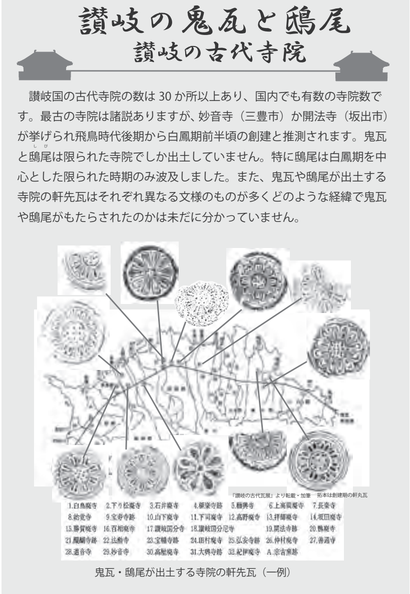
高松市埋蔵文化財センターでは、市内の埋蔵文化財に関係する普及啓発用パンフレットを作成・配布しています。高松市文化財課、高松市埋蔵文化財センター、高松市歴史資料館等の各種施設で無料配布いたします。

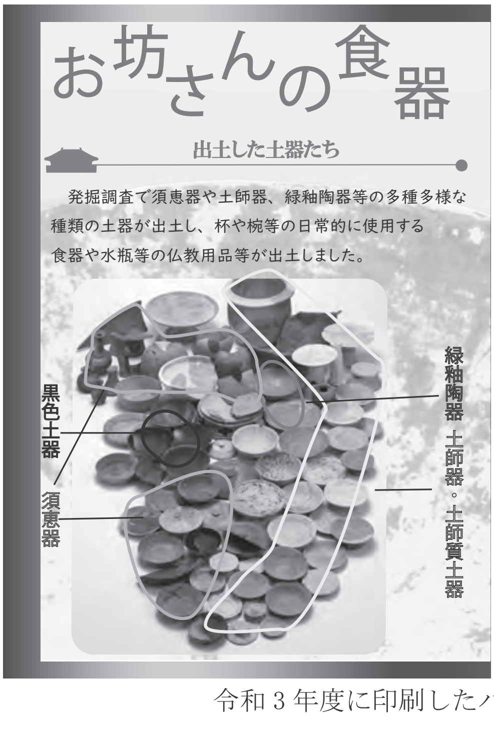

高松市埋蔵文化財調査報告　第217集
高松市埋蔵文化財センター活用事業紀要第1集

史集 高松

第1号

2021年３月
高松市教育委員会





令和３年度に印刷したパンフレットの一部（一部は既刊の復刊）

第４章　体験学習

第１節　体験学習講座

高松市埋蔵文化財センターでは、誰もが気軽に歴史に触れることができる昔のものづくり体験や、高松の歴史や史跡について学ぶ講座を多数実施しています。

通年実施の体験講座（①〜④）には、おひとり様から予約可能である（①②）ことから、親子はもちろん大人の余暇を楽しむ方等、様々な年齢層が来所します。

夏休み等長期休業期間の小・中学生や親子連れ向けに随時実施する講座（⑤〜⑧）には、歴史好きのたくさんの子どもたちが市内外から参加します。

①鋳造体験　金属を溶かして鋳型に流し込む。取り出し、削り、磨いたら完成。
　種類：伝讃岐国出土袈裟襷文銅鐸ほか全６種　金額：500 〜 1300 円

②瓦づくり体験　粘土をこねて型抜き。トースターで焼き上げ、彩色して完成。
　種類：讃岐国分寺跡出土鬼瓦型ほか全３種　金額：300 円

③勾玉づくり体験　滑石を好きな型に合わせて削り、磨いて、自分だけの勾玉を作成。彩色、紐結びをして首飾りやストラップにします。
　種類：川島本町遺跡出土型ほか多数　金額：500 円

④消しゴム粘土作り体験：瓦型を使った消しゴム粘土作り。10 分ゆでたら完成。
　種類：讃岐国分寺跡出土鬼瓦型やたまもん型ほか全３種　金額：100 円

⑤土器焼き体験：粘土で土器を作り、窯を作って焼き、自分の土器で炊飯体験。
　随時実施・全４回程度　金額：500 円

⑥高松の古墳教室：市内に所在する古墳について学び、出土遺物を観察。三角縁神獣鏡型のアメも作ります。
　随時実施　金額：無料

⑦埋文センターのお仕事体験：埋蔵文化財センターの役割を知り、文化財専門員の仕事を体験します。
　随時実施　金額：無料

⑧史跡探検・町歩き：屋嶋城跡の探検や高松城下町歩き等史跡を歩いて学びます。
　随時実施　金額：無料

⑨企画展関連講座：令和３年度は「測量野帳の使い方 ヤチョラーのタマゴ養成講座」を開催　金額：無料

①鋳造体験（夏休み講座）

①出張鋳造体験（夏休み講座）

③勾玉づくり体験

①鋳造体験　銅鏡

①鋳造体験　たまもん

①鋳造体験　銅鏃

①鋳造体験　和同開珎

①鋳造体験
三角縁神獣鏡

①鋳造体験
伝讃岐国出土
袈裟襷文銅鐸

体験学習参加者等一覧（令和３年２月現在）

	展示室 観覧者数	体験講座 件数	体験講座 参加者数	緑地帯 利用者数	埋文デリバリー （学校）	埋文デリバリー （一般）
				（人）		（回）
令和元年度	1040	515	856	3549	13	38
令和２年度	895	90	175	4379	9	27
令和３年度	787	64	158	2932	12	30

③勾玉づくり体験

⑤土器焼き体験⑴

⑤土器焼き体験⑵

⑤土器焼き体験⑶

⑥高松の古墳教室⑴

⑥高松の古墳教室⑵

⑦埋文センターのお仕事体験

⑨ヤチョラーのタマゴ養成講座⑴

⑨ヤチョラーのタマゴ養成講座⑵

第２節　体験キット販売・動画配信

高松市埋蔵文化財センターでは、通年実施している鋳造体験の中から、「三角縁神獣鏡」と「伝讃岐国出土袈裟襷文銅鐸」の２種を自宅で楽しめる「研磨体験キット」として販売しています。また YouTube で作り方動画を配信し、キット購入者にわかりやすい説明のもと体験ができる環境を整えています。

自宅で好きな時間に自分のペースで楽しめる体験キットは、県外の方々からもお申込みをいただく等、在宅で気軽に楽しめる新しい体験講座として好評を得ています。

キット：全２種　三角縁神獣鏡（1,000 円)、伝讃岐国出土袈裟襷文銅鐸（1,300 円）

「研磨体験キット」

YouTube「おうちで研磨体験」QR コード

「研磨体験キット」ちらし

第 5 章　令和 2 年度連載講座の成果について

第 1 節　讃岐地域の中世お墓事情

狭川　真一（大阪大谷大学）

1. はじめに

讃岐の中世墓研究は屋敷墓と呼ばれる土葬墓の研究が進んでいるが、それ以外の状況についてはまだこれからの状況と言える段階である。そこで今回は、屋敷墓を除くその他の中世墓の様相について紹介したいと思う。

2. 讃岐の塚墓

①塚墓の系譜

讃岐の中世墓で分析が進む屋敷墓に先行する遺構として、川西北・原遺跡で確認された方形周溝遺構がある（佐藤 2000 ／第 1 図）。まず、報告書からその要点を抽出する。

遺跡は丸亀平野のほぼ中央に位置しており、周辺に丘陵等はない。方形区画墓とされる遺構は 2 基あり、ST01 とするものは墳丘規模 6.1 × 6.1 mの正方形で、南辺溝の中央を掘り残して陸橋としている。埋葬の主体部は残っていないが、周溝内に 2 か所の炭化物集中地点があり、うち北側のものから骨片 1 点が出土した。人骨か否かの判定は不可能だったようである。ST02 は、ST01 から南へ約 20 m離れた地点に構築され、墳丘規模は 5.2 × 5.2 mでやや小さいが、やはり南辺中央部に陸橋を造り出している。両者とも遺構の方位は近似しており、北でやや西に振れるもので、西側を流れる SD07 とほぼ等距離をおいて並行しており、3 者の関係がうかがえる。方形区画墓の東側には目立った遺構は確認されていないが、調査区の東端部で小規模な掘立柱建物が見つかっている。

さて、遺構の年代は区画溝内から出土した遺物より ST01 が 12 世紀前半、ST02 が 12 世紀末葉から 13 世紀前葉に推定されている。ただ、両遺構が隣接する SD07 を意識した配置である点や、遺物は遺構の埋没時期を示すものであると捉えると、両者の造営はもう少し近接している可能性もある。また遺構の種別として構造的には塚墓に属するものであるが、ST01 の溝内から炭化物と骨片が出土しているので、火葬場をそのまま墳墓とした形態と報告されている。いわゆる火葬塚ということになる。

火葬塚として報告される発掘事例はいくつもあるが、区画溝内に火葬施設を確認した事例は三重県東庄内 B 遺跡の中世火葬場址（三重県 1970）とされるものだけである。区画の中央に直径 0.8 mの火葬土坑を設定し、墳丘四隅に柱穴（火葬場を幔幕で囲う折の支柱か）があるというもので、墳丘規模は 4.0 × 4.4 m程度。出土遺物の年代は 13 世紀中頃から後半と捉えられる (1)。また、京都府長岡京市西陣町遺跡 SX13002 は墳裾に該当する部分の一辺が 2.5 ～ 2.6 m、区画溝外側での規模は一辺 3.4 ～ 3.5 mで、区画溝内からまとまって出土した土師器皿が 11 世紀第 3 四半期から第 4 四半期のものであり、それが造営年代と推定されている。また区画溝内からは石製相輪が出土しており、当初は墳丘上に立てられていたことを窺わせる。さらにこの遺構には外郭遺構となる掘立柱列が伴っており、その規模は一辺 40 尺（約 12 m）と推定されている。火葬施設遺構の確認はないものの、『類聚雑例』に見える後一条天皇の火葬記事との比較から、火葬塚として確実性の高いものである（木村 1985）。京都大学構内でも火葬塚が見つかっており、検出時の区画溝の幅が 2.4 m、深さ約 1.0 mを測るもので、墳丘裾部の一辺は 4.8 m、溝の上辺外側の規模は一辺 7.8 mを測る。この遺構にはさらに外郭溝があり、それは一辺約 15 mを測る（岡田ほか 1979）。

現在のところ、火葬塚と認定して差し支えなさそうな遺構は以上の 3 件（第 2 図）であるが、いずれも遺構自体の規模は小さく、一辺 5m 以下である。最大の京大構内のものも溝が深いため地上に顔を出していた部分の一辺は 3 m程度であろうし、おそらく墳丘の高さもそれほど高いものではなかったと推測され、墓域は広かった可能性はあるものの遺構の規模は大きくないものである。上記の 3 例は諸条件を揃えて火葬塚と推定されており、単に区画溝が廻っているだけでは火葬塚と断定するのは難しい。区画を有する墓のうち、中央に土葬墓を有するものは塚墓で位置付けられており、主体部を有しないものはそのどちらとも決し難い。川西北・原遺跡 ST01 の場合も炭化物が溝内にあるというだけでは、積極的に火葬塚と断定する要素とは言えないだろう。また、ST02 については何の情報もない。ここでは葬法が限定できないものや火葬塚も含めて区画を有し、盛土の存在を予想させる墳墓遺構について塚墓という用

語で検討を行いたいと思う。

②塚墓の事例

各所の事例を通覧した訳ではないが、平安時代（12 世紀以前）に遡り、方形の周溝を有する塚墓とみられる遺構は、川西北・原遺跡のほかは京都市京都大学構内、長岡京市西陣町遺跡、静岡県磐田市一の谷遺跡ということになる。前 2 者は先述のとおり火葬塚とされるものでやや小規模なものである。そして最近になって京都市内の六波羅政庁跡音羽・五条坂窯跡（以下、六波羅政庁跡とする）でも、方形の周溝を有する塚墓と考えられる遺構が確認された。以下、これらの遺構を検討してみよう。

まず西陣町遺跡と京都大学構内遺跡の塚墓（報告書では別名称だがここでは塚墓で統一）は、いずれも火葬塚と推測されていることは先に記したとおりである。これは後一条天皇の葬送記事にみえる貴所と内外の垣の関係との比較研究で推定されているとおりである。西陣町遺跡の場合は、当該地とつながりの強い貴族層で当時の貴族の日記等に記されることのない程の層とされ、さらに踏み込んで九条家の可能性を述べるに至っている（木村 1985）。京都大学構内遺跡の塚墓も外郭を区切る溝を持ち、二重の結界が成されている点で共通し、遺構を造営した階層も西陣町遺跡に近い位置にあるかと思われる。つまり、いずれも平安時代の中級程度の貴族層の墓所ということであろう。

また、一の谷遺跡はその保存運動の過程で多くの研究成果を生み、一の谷墳墓群から見下ろせる見付の集落と関連づけて在庁官人層の墳墓ではないかと推定されている（石井 1993、義江 1988）。

さらに近年調査された六波羅政庁跡（第 3 図）では方形区画墓と称する遺構が 3 基確認され、調査区北隅で確認された SX135 は墳丘規模が一辺 9.5 ｍ程度となる大きなもので、主体部は木棺墓である（菅田 2019）。この南に中心軸を同じくする小振りな方形区画墓が確認されているほか、調査区の東寄りには土坑墓、木棺墓がこれも互いに軸線を揃えるように並んで構築されている。これらに囲まれた空間は攪乱によって大きく破壊されているが、遺構の痕跡も見えないことから墓に伴う空閑地（広場）だった可能性も考えられる。ここで注目したいのは最大の方形区画墓 SX135 の南西隅付近に集中して、白色凝灰岩製石造物片が集中して出土していることである。このうち復元が可能なものは平面形が六角形の笠と軸部であり、両者は本来一具だったとみられ、笠塔婆の初期の事例として捉えることができるものである。この笠塔婆の年代を直接語るものはないが、石造物の出土地点の一つに 12 世紀中頃に埋没した遺構がありそれ以前には存在していたこと、土坑墓の一つに 11 世紀中頃に埋葬されたとみられる遺構があるため、これが当該墓域造営年代の一時点を示していることを踏まえると、笠塔婆は最も中心となる方形区画墓 SX135 に伴い、その製作時期は 11 世紀代に遡る可能性があると考えられる。つまり当該墓域の設定もその頃まで十分遡るものであり、しかも一定の区域を管理し、計画的に造墓していることが理解できる（狭川 2019）。さらにこの調査地点の北側約 100 ｍの地点には、六波羅密寺や六道珍皇寺があり、ここが古くから鳥部野と呼ばれていた墓所の一角であることを知るのである。鳥部野周辺は庶民層だけでなく、9 世紀には仁明天皇の后の藤原澤子の墓所が置かれ、近くにはその父母の墓もあったと推定されている（山田 2011）が、調査された遺構群は 11 〜 12 世紀であり、鳥部野墓地の整備、管理が進む中でやや下位の貴族層も一族の墓域を設定できるようになったかと思われる。

こうした平安京内の事例を見ると、11 〜 12 世紀を通じて貴族層は方形の塚墓を採用していることが理解できる。盛土の形態や高さは不明であるが、描かれた塚墓として河本家本『餓鬼草紙』の「疾行餓鬼」や「食糞餓鬼」を挙げることができる。多少の誇張はあるものの盛土に一定の高さがあったことが窺える。

③讃岐と平安京

以上に見たように方形区画溝を有した 12 世紀以前の塚墓は、平安貴族の墓所に用いられていた可能性が高い。一の谷遺跡の場合は丘陵上で群集する点が異なるが、川西北・原遺跡の塚墓は平地に造営され、南北溝と空閑地の存在からある程度の墓域が確保されていたようにも見える。これらのことから川西北・原遺跡の塚墓は、その被葬者が平安京と強いつながりを有していた人物ではないかと想定したい。以下に讃岐地域と平安京との関係を示す事項をいくつか抽出してみたい。

平安京と讃岐地域を結ぶものの一つに、先述の六波羅政庁跡出土の白色凝灰岩製笠塔婆がある。大きな塚墓 SX135 に伴って造立されたものとみられるが、当該地点から出土した白色凝灰岩には黒色ガラスの粒を含むものと含まない

ものの2種類があった。いずれも讃岐産の石材（火山石<ひやまいし>）とみられる。讃岐の石材や石工と平安京が関係することは古文献に見えていて、遠藤亮氏の整理（遠藤2005）があるので、それを参考にいくつか抽出しておこう。

『日本三代実録』元慶元年（877）二月四日条に「詔復讃岐国徭十日縁造大極殿石多労役也」とあって、讃岐国から徭役で大極殿の基壇の造作を行っていることが分かる。この記事は石材が平安京にもたらされたかどうかは記述されていないが、基壇造営に際してわざわざ讃岐から人を呼び寄せていることが分かる。当時の讃岐には熟練された石工の技術があることを中央に知られていたことが理解できよう。また、『長秋記』長承三年（1134）五月二日条には、鳥羽殿勝光明院の建立に際して讃岐石の運上を催促する文面がみられ、同保延元年（1135）六月二十四日条では、「讃州作石事」としてやはり運上の遅延に伴う催促を行っている。実際に大極殿跡や鳥羽離宮遺跡から讃岐産の石材が出土している他、現在の安楽寿院境内には成菩提院出土とされる三尊石仏が祀られるが、その石材が火山石製とみられている。

また仏塔類では京都市北区の御土居跡から火山石製の笠塔婆残欠が出土している（持田・関広2017）。この資料を見ると梵字を彫り込むのではなく、月輪内部を浅く彫り込んで梵字を陽刻するように浅く浮き出させている。石造物でこうした梵字の彫出方法をするものは知見になく、きわめて珍しい資料と言える。報告書でも指摘しているように、化野出土の蔵骨器に被せられていた金銅製の蓋に事例を求められるほか、梵字瓦も完成品はこのような形に文字が浮き出している。身近にあった工芸資料などを模倣しながら製作したとみられ、金工品を模した可能性を推定した報告書の指摘に賛同したい。

またこのことは、12世紀以前に遡る火山石製の石造物が讃岐では未確認であることと関係しているだろう。つまり、讃岐産石材を利用して京都で生産されたものと考えたい。讃岐では、石材の切り出しを行い平安京へ運ぶことはあったが、細かな細工が必要な仏塔を受容する環境には未だなかったのであろう。

このように、文献記録、考古資料ともに讃岐産の石材が平安京に運ばれていたことを示しており、都ではこの石材を重要視していたことがわかると同時に、讃岐と都との深いつながりが指摘できるのである。

次に荘園関係の在り方に注意しておこう。川西北・原遺跡の所在する丸亀市を含む一帯は那珂郡に属するが、そこに所在した櫛無保は、鎌倉時代前期の記録では平安京の法勝寺領となっていることが知られる。法勝寺は白河院の御願寺であり、封戸が御願寺の経済を支えていた。封戸はやがて保に転化したことから、櫛無保は讃岐国に分置されていた法勝寺の封戸が便補されたものと考えられている（田中1995）。他国の様相を把握できていないので単純な比較はできないが、讃岐那賀郡に皇室関連寺院の保が存在したことに注目しておきたい。

また、藤原良相邸跡と考えられている平安京右京三条一坊六・七町からは「讃岐国寒川郡／難破郷秦武成」と記載された付札木簡が出土している（丸川ほか2013）。讃岐国寒川郡難破郷から何かがここに運び込まれている事実があったことを示しているが、寒川郡内に火山石の石切場や大串石切場跡等の知られていることに注意すべきであろう。

筆者が目についた情報を抽出したに過ぎないが、讃岐地域と平安京の間には石材だけでなく様々なものを通じた交易、交流が存在したことを理解することができる。こうした事象を背景として、川西北・原遺跡の方形区画墓（塚墓）が存在するものと理解したい。全国的に見渡しても12世紀に遡る塚墓は稀有な例であることも踏まえて、讃岐と都の関係を物語る資料として評価できるのではないかと考える。

3. 古墳と火葬墓

西日本を中心とした中世墓にもっとも多く見られるのは、方形の石組を持つもので、中央部に蔵骨器を埋納したり、石塔を建立する事例もある。しかし、香川県で明確な発見例は見られず、また土葬墓の発見例も少ないので、中世の火葬された遺骨の行方について弥谷寺などの特定の霊場寺院への納骨を推定する意見もあった。しかし、高松市相作馬塚古墳の裾部で見つかった墳墓は、方形の石組を有するもので貴重な発見となった（高上2017）。概要を記しておこう。

古墳の北面裾部に3基の区画墓が確認され、一つは3.6×4.0mのほぼ方形を呈するもの、いま一つは8,5×4.3mの長方形とみられるもの（山側の石列が不明瞭）、もう一つは一辺1.8m以上の方形とみられるが石組はないとされるもので、中央に浅いピットを伴っている。またその間に集石墓があり、五輪塔地輪とみられる方形石が置かれ、その脇から蔵骨器や筒形土製品（経筒か）が見つかっており、14世紀前葉の時期に推定されている。明確な埋葬の主体はこのごく一部しか確認されていないが、墳裾の一部に小ピットが確認されており、本来は浅いピット状の埋葬施設（あ

るいは袋状のものに遺骨を格納して埋置する程度）が存在したものと推測される。

また石塔の残欠も多数出土しており、いずれも15～16世紀頃と推定される小型化した五輪塔類で、墳裾部に並んでいた可能性を考えている。

遺構から前後関係を正確に把握するのは難しいが、出土した遺物などを含めて大胆に推測すると、まず集石墓ができるが、そこは経塚として造営されたと考えられる。中世墓の成立段階あるいはそれ以前に経塚を造営する事例は各地にみられ、埋経によってそこが聖地化するのであろう。以後、周囲に墓地が形成されてゆく。遺構の前後関係は把握できないが、その後は方形区画墓が展開し、おそらく火葬骨を簡易に埋葬する程度のものと思われる。それと並行するように小型の石塔が建立され、墓地の景観は大きく変化し、石塔が並ぶ姿となり終焉を迎えるとみられる。典型的な中世墓の流れで説明できるもので、こうした遺構が今後も各地で確認される可能性は高い。

さて、この遺跡の特徴は、古墳の裾部に中世墓を形成するということである。そうした事例は各地にみられ、京都府木津川市前椚遺跡（戸原ほか1982）は13世紀後期～14世紀代に造営されたもので、古手の五輪塔を安置するものや、内部に青磁鋺を埋納するものもあった。火葬と土葬が混在している珍しい事例である。福岡県太宰府市篠振遺跡（狭川ほか1987）では墳丘状隆起部の裾に土葬墓が展開し、墳丘上から土師器皿は鉄刀子などが出土することから、いわゆる遺棄葬が行われた可能性が推定された。古墳あるいは自然地形であっても墳丘状の隆起を成すものを中心に墓地が展開する事例である。おそらく古墳（墳丘状隆起）をスツゥーパに見たてたものと思われ、各地に事例は多い。中世に成立し現在も墓地として利用されている奈良市中ノ川墓地の景観は、墳丘状に隆起した地形の頂上に五輪塔（14世紀中頃）を安置し、その周囲を埋め墓とするものである（土葬の埋め墓は近世以降の景観である）。

また中世墓造営以前に経塚を造営する事例では、奈良県山添村地蔵山遺跡（佐々木1989）で好例が知られるほか、京都府北部の事例を集成した成果（杉原2021）などもある。先述のとおり、所定の場を聖地化したあとに墓地を造営したとみられ、各地にその例があることを思うと、共通した思想的背景が存在したことを推測させる。将来の弥勒下生の地を経塚造営によって成立させ、その聖なる地点に死後も一族が集う姿を想定したのであろう。

4. 石塔の分布は語る

高さ4～5尺規模以上の石塔と小型化した石塔から構成される石塔群について主要なものを抽出して概観し、それらに類する石塔群の事例を含めながら、こうした石塔群の歴史的な位置付けを検討してみたいと考える（第8～11図）。

①神内家墓地石塔群（川畑・藤澤2005）　高松市西植田町に所在する中世の五輪塔を中心として形成された墓地で、神内城跡の北東側に形成されている。城址から墓地へ向かう里道の突き当りに古い五輪塔と石敷きがあり、その手前に里道に沿って五輪塔が点在している。五輪塔の石材は大きく2種類があり、白色凝灰岩と角礫岩で、前者が古い資料に採用されている。また大型のものが古く、小型のものが新しくなる傾向は一般的な石塔墓の特徴と言え、大型のものは空風輪が別材となり5石で構成されるという珍しいものであるが、四国地方には若干例が存在する。この墓地でも残欠化したものも含めて3基が知られる。五輪塔の年代観から墓地の造営開始は鎌倉時代後期頃と推定されており、室町時代を通じて利用されていたとみられる。

現在の地形を見ると五輪塔群が南北に並ぶ列の東側は幅5～10 m、長さ約30 mの平坦地となっており、この部分に小型の石塔が埋もれている可能性があるほか、石塔を持たないような石敷の墓も存在する可能性が高い。

なお神内家は「神内氏系図」によれば、関東の畠山重能の弟が讃岐植田郷へ来て神内氏の養子となり、右近頭政成を名乗って神内城を築き、源平屋島合戦に源氏方で参加したとされている。平安時代末期から鎌倉時代初期のことである。以後、代々この地域を治めていたようで、在地の武士層（領主層）とでも呼ぶべき位置付けである。

また、関東武士が西国に移動し、その定着が確実になった時点でこの階層に墓地形成の動機ができたと報告書では締めくくっている。

②興隆寺跡石塔群（川勝1975、松田2010）　三豊市豊中町下高野に所在する寺院跡とされる一角に、凝灰岩の岸壁下部を庇風に掘り込んで窟状とし、その中に石塔群を並べている。この庇風で横長の窟は上下に分かれ、下段は不動明王坐像や大型の五輪塔を中心としてその左右に小型の五輪塔群を配置している。上段の窟も同様の形状をするが小型の石塔群で構成されている。この下段の石塔群を詳細に整理した松田氏の意見に従うと、初期には5石彫成となる大型の五輪塔で構成され、それらは鎌倉時代後期とみられる。以後やや小型化したものが並び、南北朝時代から16世紀後半頃まで継続して造営されている。石材は天霧石と三豊石の2種で構成され、初期には畿内の影響を受けるな

ど形態的な特徴が知られている。また川勝氏は、足立遠元・遠親が本山庄の地頭職であったことから、この石塔群の造営者に関係していると推定したが、年代的に若干の開きがあることは指摘しておかねばならない。しかし、そうした地域に根付いた領主層が造営の主体者である可能性は高いと考えられる。

③善通寺歴代住職墓の石塔群（海邉・松田 2005） 境内の西端で川に面した位置にあり、近世のものを含めると 70 基近くにのぼるが、中世のものは大型から中型の五輪塔 5 基と宝塔 1 基で構成されている。宝塔は基礎と塔身部分が残り、笠部は別材である。基礎は上面を階段状にし、中央に塔身を据える円形の窪みを穿つが、中央部は貫通している。塔身表面には大きな梵字「バン」を描き、内部は中空で基礎とつながり、塔身上部には納入用と思われる大きな孔が穿たれるが、この孔は後発的なものかも知れない。五輪塔は小礫が混入する粗い石材（天霧石）を使用しており、風化も進んでいるうえに組合もバラバラである。ただ大型のものは地輪を低めに作るものが多く、水輪は酒樽形を呈し、火輪の勾配は緩めである。表面に梵字は認められない。鎌倉時代末期から南北朝時代のものとみられ、断定は不可能なものの歴代の高僧墓とする伝承を否定する要素もない。

④本山寺石塔群（海邉・松田 2005） 本山寺中興の歴代高僧墓と伝承されている石塔群で、境内の一角に 2m を前後する大型の五輪塔が 5 基並び、脇に宝塔もある。五輪塔は、地輪が低平なものが主体で、水輪は最大径がやや上位にある壷形を呈し、空風輪は別石で作られ、当初は 5 石彫成の塔であったことが分かる。三豊石とされる凝灰岩製で、表面に梵字はない。宝塔の塔身は中空で表面下半部が破損するが、その上辺部に円形の納入孔とみられる穿孔部痕が見える。

以上の 4 例を掲げたにすぎないがこの範囲でみると、鎌倉時代後期頃から続く墓所には在地の領主階層の墓と寺院の歴代墓の 2 種類が存在するようである。香川県内には類似の石塔群がいくつも知られるところであり、以下に海邉・松田両氏が作成された一覧等を参考にそれらを抽出、列記してみると、表 1 および第 5 図のようになる。第 5 図のなかの○は寺院の歴代墓の可能性があるもので、中世後期の小型化した五輪塔を含まず、中規模の石塔で終了している傾向がある。これは例えば、律宗の歴代墓とされる奈良市西大寺奥之院や大和郡山市額安寺の鎌倉坂墓地、大阪府羽曳野市高屋宝性院墓地（西琳寺に移設）などでも南北朝時代の範囲内で歴代墓の石塔の造営を終えている。歴代墓を造営し続ける機運が低調になったものと思われる。ただ善通寺・本山寺両墓所で注意したいのは、塔身が中空で随時奉納可能な奉籠孔を側面に穿っている宝塔が併存していることである。武士の一族墓には個別の石塔を造営し得ない一族の成員の納骨を受け入れる施設が附帯していることがあるが、僧侶墓では皆無に等しい。ただ、西大寺奥之院に隣接する墓地に骨堂を建設していることに通じるのであろうか。解釈は多々できるかも知れないが、高僧に帰依する弟子筋の人々のうち、自身では個別の石塔を造営できない立場の者がこうした共同納骨塔に埋納されたのではないかと思われる。祖師を慕う弟子が自身の遺骨を祖師の墓所近くまたは蔵骨器内に追葬してもらった事例はいくつか知られており (2)、そうした人々の受け皿として奉籠孔を保有する宝塔を造営している可能性を考えておきたい。

これに対して他の 12 地点の墓所を第 7 図に見るように分布傾向を把握してみると、旧郡内で 1 ～ 2 か所程度に分散して分布していることが分かる。現状で空白の郡もあるが、たとえば香川郡の場合は高松城の石垣に転用された石塔が膨大な数に上っており、明らかに一定期間継続していた墓所を破壊して石塔を転用していることから、この付近に中世墓の存在を予想させる。他の空白の郡も今後確認される可能性は大いにあるだろう。この傾向は、石塔群を造営し得たような集団（一族）が郡の中に 2 つ程度は存在することを示している。また、主要な港の近くに認められるものもあることに注意しなければならないだろう。彼らは交通の要衝を掌握し、物流にも関与していた可能性のある集団だったことが予想される。つまりこうした石塔群は、当該地域の中で政治的・経済的に優位な立場にあった集団の一族墓と捉えることができるだろう。

今後、より詳細な石塔の分布傾向が把握され、造営開始および終了の年代も考慮した分布図が作成できたならば、さらに具体的な造営者層を知ることができるものと思われる。

5. まとめ

ここで紹介しなかった屋敷墓と推定される土葬墓を含めて、讃岐地域の中世墓は現在までに事例も増加し、細かな検討が加えられる資料が揃ってきた。ただここでは、それらの一部を概観したに過ぎない。今後は機会をみてより詳細な検討を加えてゆきたいと思うが、石塔を含めた中世墓の研究が地元の研究者によって進められることにも期待を

寄せたい。

本稿は高松市教育委員会主催の『探求！たかまつ遺産』で講演した内容を整理したものであるが、1・3は『さぬき野に種をまく』に投稿した文章を一部改変して転用したものであることをお断りしておく。講演の機会を与えて下さった高松市の関係者に感謝申し上げます。

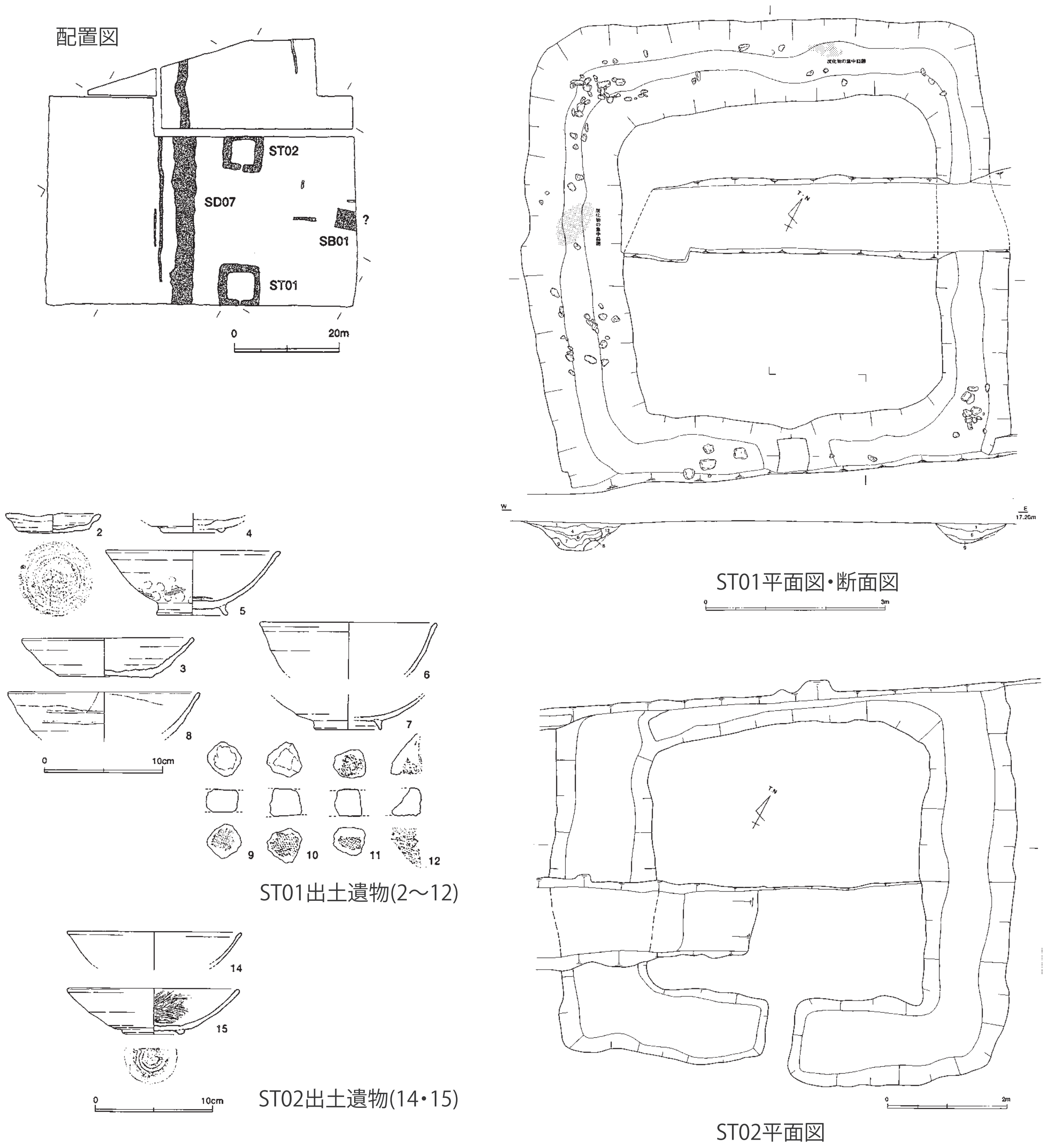
【註】

(1) 伊藤裕偉氏（三重県教育委員会）のご教示を得た。なお報告書は、鎌倉時代頃と推定する。

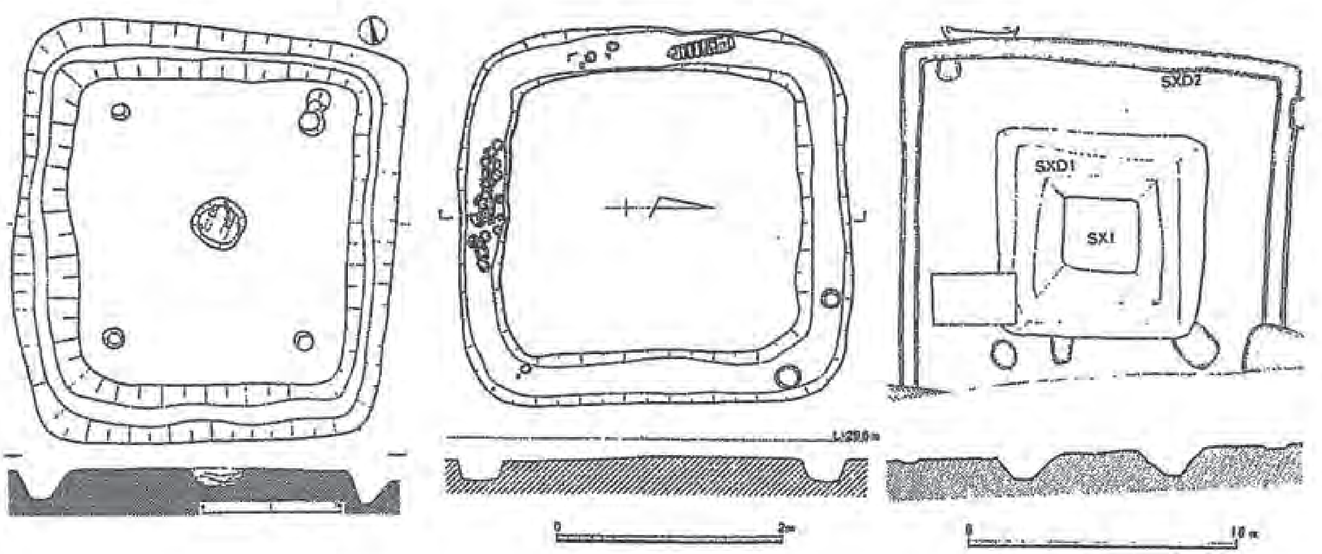
(2) 鎌倉極楽寺の忍性墓の調査では地輪下面に大小の奉籠孔を穿ち、大きい奉籠孔には忍性（良観上人）の舎利瓶、小さい奉籠孔には賢明上人の蔵骨器を奉安していた。さらに寺伝で極楽寺第二世忍公塔と称する五輪塔には、善願上人、禅忍ほか三口の蔵骨器が奉安されていた。また遺言で分骨された額安寺墓地や竹林寺の墓地でも忍性の蔵骨器を取り巻くように弟子の蔵骨器が安置されている（吉澤ほか2016）。この他、最近調査された唐招提寺中興二世證玄の蔵骨器内には少なくとも2人以上の遺骨が追葬されていることが確認された（佐藤2019b）。

【引用参考文献】

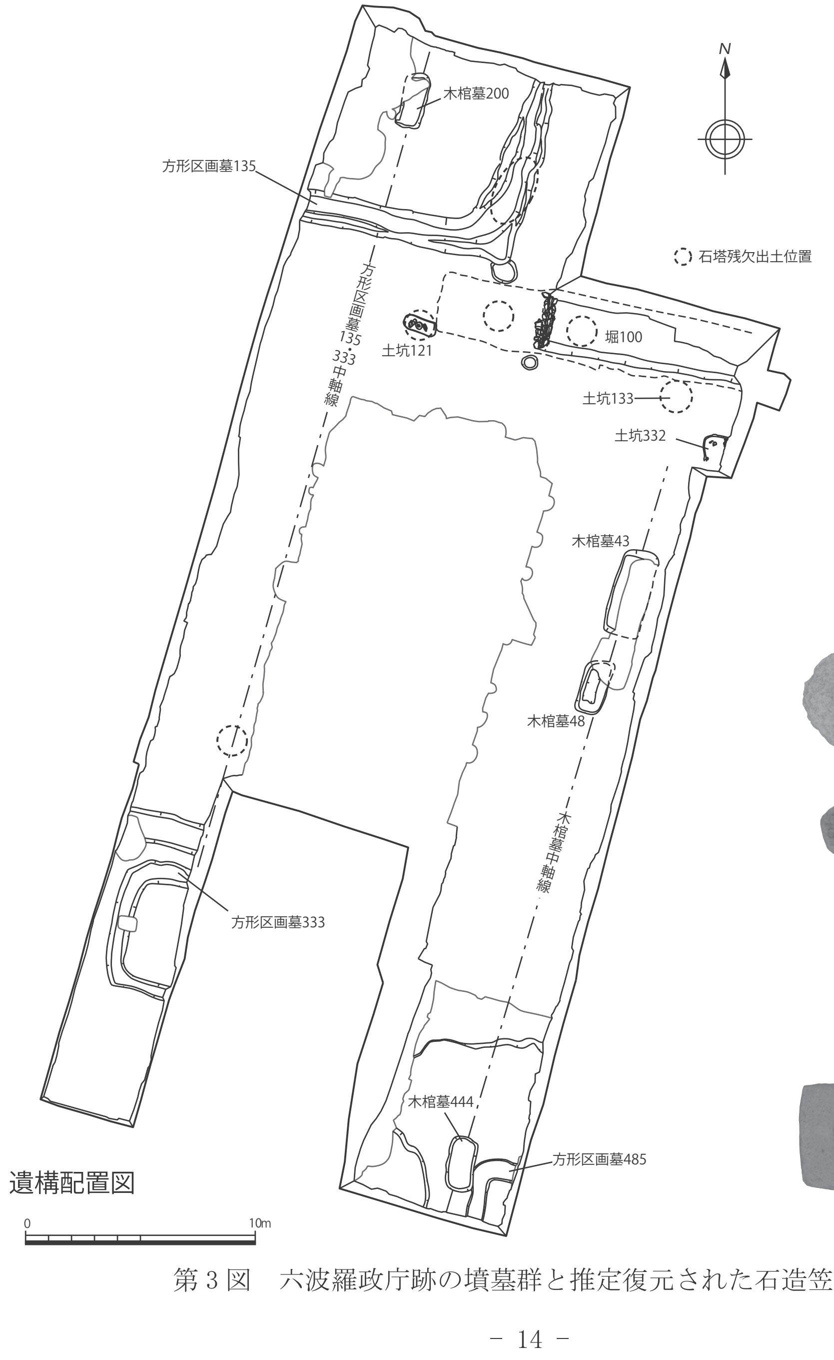
石井　進 1993「一の谷中世墳墓群遺跡の歴史的背景」『一の谷中世墳墓群遺跡』磐田市教育委員会、のち『中世都市と一の谷中世墳墓群』名著出版、1997に再録
遠藤　亮 2005「古代「壇上積基壇」に使われた讃岐の凝灰岩」『史跡賞田廃寺跡』岡山市教育委員会
岡田保良ほか 1979「京大理学部遺跡 BE29区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』京都大学埋蔵文化財センター
海邉博史・松田朝由 2005「讃岐主要石造物石切場一覧・解説」『中世讃岐の石の世界』（石造物研究会第6回研究会資料）石造物研究会
川勝政太郎 1975「讃岐興隆寺跡の古石塔群について」『史迹と美術』454号、史迹美術同攷会
川畑聰・藤澤典彦 2005『神内家墓地石塔群』（高松市埋蔵文化財調査報告第85集）高松市教育委員会
木村泰彦 1985『長岡京市埋蔵文化財調査報告書第2集』財団法人長岡京市埋蔵文化財センター
狭川真一ほか 1987『篠振遺跡』（太宰府市の文化財第11集）太宰府市教育委員会
狭川真一 2019「六波羅政庁跡、音羽・五条坂窯跡（鳥部野関連遺構）出土の石造物と墳墓遺構」（菅田2019）
佐々木好直 1989『広瀬地蔵山墓地跡』（奈良県文化財調査報告書　第51集）奈良県立橿原考古学研究所
佐藤亜聖 2019a「石造物」『四国八十八ヶ所霊場第六十八・六十九番札所 神恵院・観音寺調査報告書』（香川県「四国八十八箇所霊場と遍路道」調査報告書14）香川県・香川県教育委員会
佐藤亜聖 2019b「唐招提寺西方院所在の證玄和尚五輪塔と出土蔵骨器について」『覚盛上人御忌記念唐招提寺の伝統と戒律』一般財団法人律宗戒学院
佐藤竜馬 2000『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第35冊　川西北・原遺跡　府中地区』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調センター・日本道路公団
杉原和雄 2021「経塚と墳墓を考える」『京都府埋蔵文化財論集第8集』公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
菅田薫 2019『六波羅政庁跡 音羽・五条坂窯跡 発掘調査報告書』株式会社 文化財サービス
高上拓ほか 2017『相作馬塚古墳Ⅱ』高松市教育委員会
田中健二 1995「保の成立と荘園の寄進」『新編丸亀市史１』丸亀市
戸原和人ほか 1982「前椚2号墳発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第2冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
藤澤典彦 1978「納骨信仰の展開」『日本仏教民俗基礎資料集成』第二巻　中央公論社
松田朝由 2010「興隆寺跡石塔群の五輪塔」『香川史学』第37号
松田朝由 2015「弥谷寺の石造物」『四国八十八ヶ所霊場第七十一番札所 弥谷寺調査報告書』（香川県「四国八十八箇所霊場と遍路道」調査報告書6）香川県・香川県教育委員会
松田朝由 2018「香川県の様相」『四国地域の中世墓終焉期を探る』（第11回中世葬送墓制研究会資料）中世葬送墓制研究会
丸川義広ほか 2013『平安京右京三条一坊六・七町―西三条第（百花亭）跡―』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
三重県教育委員会 1970『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』（三重県埋蔵文化財調査報告5）
三浦純夫 1986「考察―墓地跡の評価をめぐって―」『劔崎遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
持田透・関広尚世 2017『御土居跡』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
山田邦和 2011「平安時代前期の陵墓選地」『仁明朝史の研究－承和転換期とその周辺－』思文閣出版
義江彰夫 1988「国府から宿町へ―一の谷遺跡を手懸りに見る中世都市見付の構成と展開―」『東京大学教養学部人文科学科紀要』87輯、のち『中世都市と一の谷中世墳墓群』名著出版、1997に再録
吉澤悟ほか『生誕800年記念特別展 忍性―救済に捧げた生涯―』奈良国立博物館

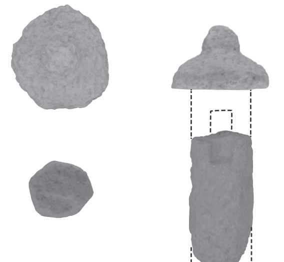


第１図　川西北・原遺跡の方形周溝遺構



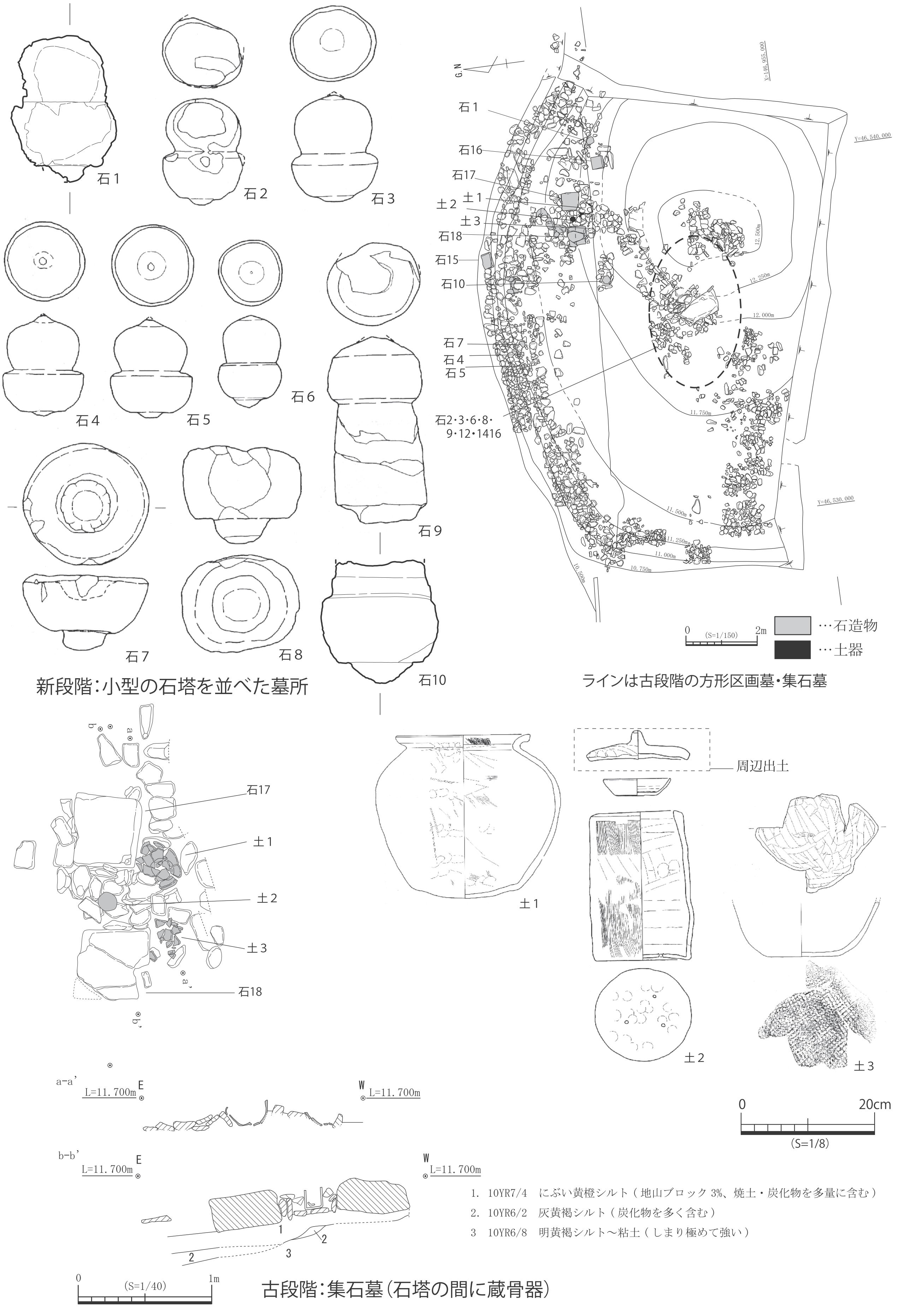
第２図　火葬塚と推定される遺構（縮尺不同）
左：東庄内Ｂ遺跡　中：西陣町遺跡　右：京都大学構内遺跡



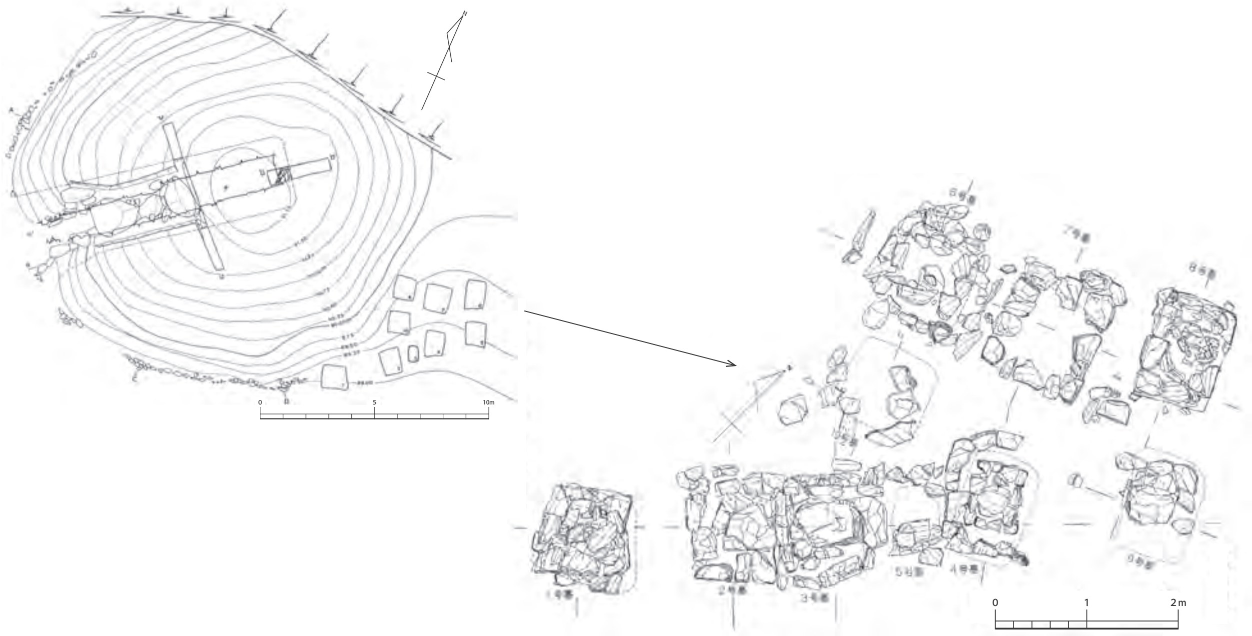


笠塔婆復原図

第３図　六波羅政庁跡の墳墓群と推定復元された石造笠塔婆



第4図　相作馬塚古墳（高松市）裾部で見つかった中世墓



第５図　前椚遺跡（京都府木津川市）の中世墓

第６図　中ノ川墓地遠景（14 世紀前～現代 / 奈良市）

第１表　香川県内所在の石塔群一覧表

番号	石塔群名	所在地	所見概要	文献
1	六車牧場石塔群	東かがわ市湊	数十基の五輪塔を主体とした石塔	海邉・松田2005
2	おこうはん石造物群	東かがわ市西山	中世後期の小型化した五輪塔および一石五輪塔が多数確認されているが、鎌倉期まで遡るような資料は見当たらない	松田2018
3	志度寺石塔群	さぬき市志度	海女の墓伝承を持つ五輪塔群。数十基存在し、中規模クラスの塔が多い。五輪塔のほかに大型の五重層塔と経幢がある。	海邉・松田2005
4	西沢氏石塔群	さぬき市造田宮西長行	鎌倉時代後期から室町時代後期にかけての石塔群。小型の石塔が中心をなす。	松田2018
5	宝蔵院極楽寺墓地石塔群	さぬき市長尾東	室町期以降の中型から小型の五輪塔群。地輪に隆珍・弥光の銘があり15世紀前期の五輪塔の形式にも合致、同所に円瑜銘の塔もある。	海邉・松田2005、松田2018
6	山崎・渡辺家墓所石塔群	木田郡三木町下高岡	大添・小添石塔とされるが、それより古い石塔が多数残る。細川清氏や高岡城関連の石塔群とみられている。	海邉・松田2005
7	神内家墓所石塔群	高松市西植田町	概説①参照	川畑・藤澤2005
8	白峯寺境内中世墓地	坂出市青海町	中世後期の小型化した五輪塔を中心としたもの。同時期とみられる宝篋印塔や宝塔も若干みられる。	松田2018
9	宝性寺石塔群	仲多度郡多度津町本通	大型から中型の五輪塔が並ぶ。香川氏(西讃岐の守護代)の墓所とされる	海邉・松田2005
10	善通寺歴代住職墓所	善通寺市善通寺	概説③参照	海邉・松田2005
11	西佐岡五輪塔群	仲多度郡まんのう町長尾	南北朝から室町期の五輪塔群。在地の領主階層の長尾氏の墓所とされる	海邉・松田2005
12	金剛院五輪塔群	仲多度郡まんのう町炭所東	室町期の五輪塔10基以上からなる墓所。山頂に経塚がある	海邉・松田2005
13	弥谷香川氏墓所	三豊市三野長大見乙	伝承では香川氏一族墓とされるが、霊場弥谷寺大師堂近くにあるので、霊場への納骨信仰に関係するものかも知れない。室町後期の石塔が中心。	海邉・松田2005
14	興隆寺跡石塔群	三豊市豊中町下高野	概説②参照	川勝1975、松田2010
15	本山寺五輪塔群	三豊市豊中町本山	概説④参照	海邉・松田2005
16	観音寺境内石塔群	観音寺市八幡町	境内の一角に大型の五輪塔数基が並ぶ。表面は無文で歴代墓かと思われる。	

第７図　讃岐国の旧郡区分と石塔群の位置図

第 8 図　神内家墓所石塔群（高松市）

第 9 図　興隆寺跡石塔群（三豊市）

第 10 図　本山寺石塔群（三豊市）

第 11 図　善通寺歴代住職墓所石塔群（善通寺市）

第２節　高松城下町の形成・拡大と構造

田中健二（香川大学名誉教授）

はじめに

本稿は、令和２年 12 月 12 日に開催された連載講座令和２年度第２回「探求！高松遺産」での同題の講演の要旨をまとめて、参考文献等を加筆したものである。当日用いた資料については、紙数の関係から付録 CD に収めている。讃岐国の国絵図、高松城図、同城下図について作成した写図などと、高松城下町の範囲、変遷などを記した「盛衰記」・「消暑漫筆」などの史料から関係記事を抄出した「『盛衰記』に見える『大手』について」のファイルである。

なお、高松城下を描いた絵図については、様々な呼称が用いられているので、本文では高松城下図と呼ぶことにした。

（註）

高松城下を描いた城下図と城下の変遷については、下記の文献に詳しい。

柴田勅夫『高松城下武家屋敷住人録上下』五星文庫　昭和 57 年５月　第５版

森下友子「高松城下の絵図と城下の変遷」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅳ』平成８年３月

香川県歴史博物館『調査研究報告』第３号　特集Ｉ高松城下図屏風の総合研究　平成 19 年３月

御厨義道「高松城における海辺利用の変遷について」香川県歴史博物館『調査研究報告』第４号　平成 20 年３月

高松市埋蔵文化財調査報告　第 122 集　『史跡高松城跡整備報告書　第４冊　高松城史料調査報告書』高松市・高松市教育委員会　平成 21 年３月

佐藤龍馬「研究ノート　高松城はいつ造られたか」『香川県埋蔵文化財センター年報　平成 26 年度』平成 28 年１月

本稿のテーマに関わる田中の研究論文としては、以下のものがある。

田中・御厨義道「小神野与兵衛著『盛衰記』と中村十竹著『消暑漫筆』について」『香川大学教育学部研究報告』第Ｉ部第 145 号　平成 28 年３月

田中「香川県立文書館所蔵高松城下図（仮称）の製作年代について」『香川県立文書館紀要』第 20 号　平成 28 年３月

田中「香川県立ミュージアム所蔵元文５年（1740）６月讃岐国高松地図について」『香川大学教育学部研究報告』第Ｉ部第 146 号　平成 28 年９月

田中「『正保国絵図』に見る近世初期の引田・高松・丸亀」『香川大学教育学部研究報告』第Ｉ部第 147 号　平成 29 年３月

以上の論文については、加筆修正のうえ、田中『近世初期讃岐国における城下町建設と開発・治水に関する研究』美巧社　平成 29 年３月に収録している。合わせて「生駒時代の讃岐国絵図について」を収録している。なお、本書は文部科学省科学研究費の報告書であるため市販していない。香川県立図書館・高松市立図書館で閲覧されたい。

１．高松城および高松城下町の立地

高松城が築城された香東郡野原については、（註）に掲げたように、歴史学・考古学・地理学の分野から研究が行われている。これらの研究から、中世の野原の地は東西の入江に挟まれ、かつて高松平野南部において東西に分流していた香東川の東側の流れがさらに分かれて瀬戸内海にそそぐ間に位置していたこと、瀬戸内海に突き出した岬状の土地の東西には港が存在し、それぞれ野原東浜・同西浜と呼ばれていたことがわかる。西には瀬戸内海に落ち込む石清尾山の山塊があり、東は屋島まで続く遠浅の入江があり、南は香東川の分流で区切られるという地形に着目して高松城は築かれたのである。

生駒親正により高松城が築城されたのは、天正 16 年（1588）のこととされる。築城当時の一次史料はなく、『南海通記』の「讃州新高松府記」、「讃羽綴遺録」など後世の編纂物でしか、その様相を知ることはできない。幸い、慶長年間（1596 － 1615）の情報を記した讃岐国絵図が複数残されており、築城からほどない時期の城下とその周辺地域の姿を知ることができる。

【図１】公益財団法人前田育徳会尊経閣文庫所蔵「讃岐高松・丸亀両城図　高松城図」写図については、御厨義道「高松城における海辺利用の変遷について」『調査研究報告』第４号　香川県歴史博物館　2008 年に詳しい。同書の口絵には原図のカラー写真が掲載されている。三重の堀に囲まれた高松城の東西には、「町屋東浜」・「町屋西ノ丸浜」、南側には「町屋」があり、外堀からの出入り口は三カ所で、それぞれ「ノカタ（野方）口」・「西浜口」・「サカタ（坂田）口」と記されている。

御厨の分析によれば、本図は丸亀城の廃止に伴い城下の町人が高松へ移住して、のちに南側の外堀から南方へ丸亀町が整備される慶長 15 年（1610）以前の情報を記したものである。高松城下から東西に延びるのちの下往還（志度街道）および丸亀街道は、東西の入江でさえぎられている。

【図２】高松市歴史資料館所蔵「讃岐国絵図」（部分）写図　高松市指定重要文化財とよく似ている絵図に臼杵市教育委員会所蔵「讃岐国図」がある。【図３】は同絵図の新図の写図である。臼杵市教育委員会所蔵「讃岐国図」には、旧図と新図があり、新図は旧図を江戸時代に忠実に模写したものである。田中が前出の「生駒時代の讃岐国絵図に

ついて」で高松市歴史資料館所蔵の讃岐国絵図について指摘しているように、この２点の讃岐国絵図は、寛永 10 年 (1633) 年、江戸幕府の命により西日本の各大名より提出された国絵図の写本と推定され、元和元年 (1615) の一国一城令以前の情報を記したものである。

高松城周辺について写図を作成したが、【図１】と同様に東西の入江が描かれている。城下からの街道もほぼ一致する。やはり、のちの志度街道・丸亀街道は入江でさえぎられている。引き潮の時は徒歩で浅瀬を渡り、満ち潮の時は船を用いていたのである。詳細は田中「生駒時代・高松城下周辺の地形について」・「続生駒時代・高松城下周辺の地形について」を参照されたい。

のちに触れる寛永４年 (1627) ８月に高松を訪れた幕府隠密の報告書である「讃岐伊予土佐阿波探索書」(東京大学史料編纂所所蔵) には、「高松西東塩入ひかた。南ハふか田なり。」と見え、同時に提出された付図の城下西側にも「伊予への道、町のうしろひかた塩入」と注記されている。

高松城下の東西に入江があって瀬戸内海が湾入していたことは、『高松百年史』高松市　1988　第３節城下町高松と周辺の変貌１城下町高松の立地上の特色 (坂口良昭執筆) の付図および【図４】香川県津波浸水想定　香川県浸水想定図 (南海トラフ地震 (最大クラスの地震)) から明らかである。そのため、城下町の拡大は東と西の両側において大きな制約があった。

『高松百年史』の付図に見るように、高松城は岬状の土地の先端に築かれ、城下の街路は、南側の外堀のほぼ中央に架けられた常磐橋を起点として南方へ延びる丸亀町・南新町の通りを南北の基準線とし、同じく常磐橋から東西へ延びる片原町・兵庫町の通りを東西の基準線として南北に直行する碁盤目状に設計されている。のち、田町へ城下が拡大された際もこの基準線に従って街路が設けられた。この常磐橋・丸亀町・南新町・田町の各通りを結ぶ線が尾根線をたどっていることが読み取れる。

生駒氏が讃岐一国の領主であった寛永 17 年 (1640) 以前の寛永年間には、西島八兵衛による満濃池の修築をはじめとする領内各地のため池の新築・修造が行われ、高松城下の周辺地域でも、東方の入江の干拓、香東川の一本化などにより大きく地形が変更された。その最後の姿を示すのが、【図５】国立公文書館所蔵「正保国絵図讃岐国図」(部分) 写図である。

正保国絵図は、正保元年 (1644)12 月の江戸幕府の命により製作された国絵図で、原本は存在しないが、各藩の控えや模写資料が残っている。【図５】の讃岐国図は、国立公文書館が所蔵する写本の一つで、美濃岩村藩主松平乗命旧蔵のもので、明治政府の要請に応えて、献上したものである。近世絵図地図資料研究会編『近世絵図地図資料集成・第Ⅰ期 (第 16 巻) 正保国絵図集成・西日本篇』平成 24 年　科学書院から写図を作成した。西島八兵衛による干拓の結果、東方の入江は夷村・富岡村まで陸地化したが、まだ志度街道は描かれていない。福岡村・木太村・山崎村を結ぶ道は長尾街道、山崎村・新田村を結ぶ道は新田街道である。西方の入江については干拓が進み、海辺を通る道が描かれている。丸亀街道に当たっていよう。ちなみに志度街道が整備されるのは、松平頼重期の慶安元年 (1648) のことである (石田忠恒『政要録』所引「讃岐大日記」)。

（註）

『讃岐国弘福寺領の調査　弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書』高松市教育委員会　平成４年３月の第１節高松平野の環境復元１高松平野の地形環境―弘福寺領山田郡田図比定地付近の微地形環境を中心に一 (高橋学執筆)

『海に開かれた都市　高松―港湾都市 900 年のあゆみ』香川県歴史博物館　平成 19 年 10 月

田中「生駒時代・高松城下周辺の地形について」『香川県立文書館紀要』第 12 号　平成 20 年３月

『都市計画道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　木太中村遺跡・文京町二丁目西遺跡』香川県教育委員会　平成 21 年２月の第２章遺跡の立地と環境第１節地理的環境 (木下晴一執筆)

市村高男・上野進・渋谷啓一・松本和彦編『中世讃岐と瀬戸内世界：港町の原像』岩田書院　平成 21 年 12 月

田中「続　生駒時代・高松城下周辺の地形について」『香川県立文書館紀要』第 14 号　平成 22 年３月

２．高松城下町の形成

生駒期から松平頼重期にかけての高松城下を描いた城下図で写図を作成したものを掲げる。

【図６】高松市歴史資料館所蔵「生駒家時代　讃岐高松城屋敷割図」写図

【図７】高松市歴史資料館所蔵「讃岐国高松城図　寛永十七年生駒家封地没収大洲藩主加藤泰興預當時」写図

【図８】前田育徳会尊経閣文庫所蔵「讃州高松之城図」写図

【図９】広島市立中央図書館所蔵「諸国当城之図」写図

【図 11】高松市歴史資料館所蔵「讃岐高松之城図」写図

これらのほか、【図 10】香川県立ミュージアム保管『高松城下図屏風』部分を用いる。

これらの城下図の製作年代については、森下友子「高松城下の絵図と城下の変遷」、佐藤龍馬「研究ノート　高松城はいつ造られたか」に詳しい。両論文で取り上げられていないものを含めて、大まかな製作年代を示すと次のとおりである。

【図６】は、記載された情報から、生駒期の寛永 15 年（1639）から生駒家が讃岐一国を改易された同 17 年の間に製作されたと判断できる。【図７】は絵図名のとおり寛永 17 年の製作であろう。【図８】・【図９】は、同じ時期の高松城および城下町を描いた絵図とみてよい。とくに【図９】に、「法泉寺」が記載されていることが注目される。同寺は【図６】に見える「けいざん（慶山）寺」の寺号を改めたもので、生駒家の菩提寺で二代一正、三代正俊の墓所である。生駒末期から松平頼重が讃岐高松藩の藩主となった寛永 19 年（1642）前後の状況を描いたものと推定される。なお、【図９】については、高松市埋蔵文化財調査報告　第 122 集 『史跡高松城整備報告書　第４冊　高松城史料調査報告書』高松市・高松市教育委員会　2009 年に写真が掲載されている。本報告書は、奈良文化財研究所「全国遺跡報告総覧」で閲覧・ダウンロードできる。【図 10】の「高松城下図屏風」の製作年代については、香川県歴史博物館『調査研究報告』第３号　高松城下図屏風の総合研究　2007 年に詳しい。寛永年間末（1642-44）ころの景観を描いたものと判断される。【図 11】の城内に屋敷地が見える松平頼重の大老彦坂織部が死去したのは、明暦２年（1656）のことであるから、本図はそれ以前の状況を描いたものである。馬場が南西に移されていることが注目される。

前出の寛永４年（1627）の「讃岐伊予土佐阿波探索書」（東京大学史料編纂所所蔵）には、高松城下について次のように記されている。

> 町西ニ弐町はかり壱筋有。東ニ弐町はかり三筋四筋あり。南ニ四筋あり。町西東長さ九町十町なり。北南横六町はかり。右、惣高松中の間也。町の家数八九百可有御座候。
> 高松西東塩入ひかた。南ハふか田なり。

ここに見られる高松城下町の様子は以上に取り上げた各種の城下図の描写とほぼ一致する。なお、同時に提出された付図については、『史跡高松城整備報告書　第４冊　高松城史料調査報告書』にカラー写真が掲げられている。

生駒期の高松城下町の南端は、法泉寺から東へ延びる寺院群（のちの寺町）から丸亀町通りを横切り福善寺から東へ延びる寺院群（のちの御坊町）へ続く南側の街路に求められよう。時期が下るとさらに南方へ広がっているが、ほぼ四番町・古馬場町をつなぐ街路にとどまっている。

この線に城下町の南端を求めたとき注目されるのは、丸亀町の南端から東側の入江へ続く水路の存在である。この水路については、【図８】・【図９】・【図 10】・【図 11】に見え、『史跡高松城整備報告書　第４冊　高松城史料調査報告書』において城下町を取り囲む「総構」の可能性が高いことが指摘されている。その論拠は、北半が埋め立てられて馬場（のちの古馬場）となっているが、本来の水路幅は外堀に匹敵する規模を持っていたと推測されること、水路の北側（城からみて内側）に寺町（のちの御坊町）が展開すること、大手筋の町名が水路より北側で「丸亀町」、南側で「南新町」となることである。また、佐藤龍馬は「研究ノート　高松城はいつ造られたのか」において、この水路の建設時期を丸亀町が成立した慶長 15 年（1610）から元和元年（1615）の一国一城令までの間に求めている。この水路が丸亀町よりさらに西方へ延びて城下町全体を囲んでいたのか、総構は完成していたのかは明らかでない。【図 10】では、南新町の亀井戸とその西方の井戸が水路の水源として描かれていて、東方へのみ流れている。

総構と推定される水路が高松城から見て、寺院群の外側に設けられていることは、寺院群も城下防衛の一翼を担っていたことを示す。生駒期の城下の西端には初代親正の菩提寺弘憲寺を中心とする寺院群があり、丸亀へ続く幹線道路である丸亀街道を扼している。その南には二代一正・三代正俊の菩提寺法泉寺から東へ連なる寺院群（寺町）があり、丸亀町通りを越えて福善寺から東へ連なる寺院群（御坊町）へ続く。この寺院群は、南の大手筋の丸亀町通りを東西から挟んでいるのである。

３．高松城下町の拡大

近年、公開された高松城下図 (個人蔵、香川県立ミュージアム保管) の図版が「城と城下町　香川県立ミュージアム常設展解説シート vol.106」令和元年９月 20 日発行、に掲載されている。解説に示されているように、この絵図は、寛文 11 年 (1671) から延宝５年 (1677) の間、二代藩主松平頼常のとき高松城に北ノ丸・東ノ丸が増築される直前の高松城および城下を描いた貴重な史料である。時期的に本図の次に知られている高松城下図は享保年間 (1716-36) 以降のものであり、空白期間を埋めることができる。なお、北ノ丸・東ノ丸が増築されたあとの高松城の姿を文政５年 (1822) の臼杵市教育委員会所蔵「讃岐国高松城石垣破損堀浚之覚」写図で示しておく。

以下、高松城下図で写図を作成したものを掲げる。

【図 12】高松市歴史資料館所蔵「享保年間 (1716-36) 高松城下図」写図

【図 13】香川県立ミュージアム所蔵「元文５年 (1740) ６月　讃岐国高松地図」写図

【図 14】香川県立文書館所蔵「高松城下図」写図

【図 15】高松市歴史資料館所蔵　文化年間 (1804-18)「高松市街古図」写図

これらの城下図について若干の説明を記す。

【図 12】は、柴田勳夫『高松城下武家屋敷住人録上下』Ⅱ高松城下絵図と古地図について、によれば、原図は松平家所蔵で戦災で失われた。大正 15 年に現在の公益財団法人鎌田共済会郷土博物館によって写本が製作されている。【図 13】の詳細については、田中「香川県立ミュージアム所蔵元文五年 (一七四〇) 六月讃岐国高松地図について」を参照されたい。昭和 13 年に鎌田共済会郷土博物館によって写本が製作されている。【図 14】は、寛延元年 (1748)- 宝暦４年 (1754) の間に製作されたものである。詳細については、田中「香川県立文書館所蔵高松城下図 (仮称) の製作年代について」を参照されたい。【図 15】の詳細については、柴田勳夫『高松城下武家屋敷住人録上下』Ⅱ高松城下絵図と古地図について、を参照されたい。なお、写図を作成していないが、香川県立図書館デジタルライブラリーで、弘化年間 (1844-48) の「高松城下町屋敷割図」を閲覧することができる。

以上の高松城下図にほぼ共通していることは、描かれた範囲である。北は瀬戸内海、東は杣場川、南は「御林」と呼ばれていた現在の栗林公園、西は石清尾山と摺鉢谷川に囲まれた地域が描かれている。本節の最初に取り上げた香川県立ミュージアム保管の「高松城下図」と比べれば、市街地の周辺についての描写が豊かである。同図は左下が欠損しているが、右下に位置するはずの杣場川に掛かる高橋から田町口へ続く三十郎土手も描かれていないから、もっぱら屋敷地と街路を描いたものと判断される。

【図 12】から【図 15】までの城下図には、「城下」以外の地域も描かれているわけである。その概略を示すと次のようである。

左側 (西側) の摺鉢谷川の流域の北半部は西浜村、南半部は宮脇村に属し、同じく下側の田町口から杣場川にかけては、中ノ村、今里村に属するから、藩による支配は町方 (城下) ではなく郷方 (村) で行われた。なお、のちに田町口の南、藤塚が中ノ村から分かれて城下に加えられる。図の右側 (東側) の杣場川の東岸側は空白か道のみ描かれているが、北半部は松島村、南半部は花園村に属していた。これら郷方に属する村々は近代において高松市の一部となり、「村」を「町」と表記を変更したが、その読みは「ちょう」であって、城下に属した商人町・職人町・寺町の「町」を「まち」と読むのとは区別されている。なお、武家町のうち一番から九番までの番丁と北・南の亀井町は、いずれも「ちょう」と呼んでいた。

生駒期から松平頼重初期の高松城下の範囲と比較すれば、西方と南方において城下町が広がっていることがわかる。東側は杣場川で限られている。立地について述べた際に指摘したように、城下の西部石清尾山との間と城下の東部はかつて入江となっていて、陸地化したのちも低湿地であって居住するには適しなかったのである。城下西方については郷東の端から、現在の扇町の通りにかけて砂嘴 (砂堆) が発達したため、東西に長細い屋敷地が広がったのである。南方については、寛永年間に生駒家により香東川流路の一本化が行われ、東側の流れの水量が激減したことが、市街地化を促したと考えられる。讃岐のため池誌編さん委員会編『讃岐のため池誌』香川県農林水産部土地改良課　平成 12 年によれば、東側の流れは現在の御坊川の川筋を中心にして流下し、栗林公園南方で摺鉢谷川と分岐し、杣場川も末流であったという。

４．松平期における高松城下町の範囲と構造

高松城から城下への出口は、築城の当初から、東・南・西の３か所で、いずれも外堀に架かった橋から出入りしていた。松平頼重期に出された法令をまとめた香川県立文書館所蔵「源英様御代御令條之内書抜」（『高松藩御令條之内書抜上巻』香川県立文書館、平成 10 年３月）の寛永 20(1643) ５月 14 日条には、「西御門、（中略）丸亀町出口御門、東濱出口御門三ケ所御番所」と見え、寛文８年 (1668) ４月条には、「南之追手　東之追手　西之追手」との記事が見える。四代藩主頼桓期の「源懐様御代御令條之内書抜」（同前）の享保 20 年 (1735)10 月 28 日条には「大手三ケ所御門」、高松新湊町年寄鳥屋の「御用留」（高松市歴史資料館所蔵）の嘉永５年 (1852) ９月７日条の藩から示された「殿様御乗馬御通筋道順」には「鳥屋前東大手御門」と見えるから、西御門が西の大手門、丸亀町御門が南の大手門、東浜出口御門が東の大手門であったことがわかる。

城下の出入口については、前出の「源懐様御代御令條之内書抜」同日条に次のように見える。

一、五か所出口の外、出入口所々これあり候に付き、右の事郡奉行え申し合わせ置き候事。
一、五か所出口番所え御足軽罷出で候義、横目中より指し出し候段申し聞かせ候。
一、御中陰の内、福田町南丁二ケ所木戸の内一か所明けず申し付け候。
一、右御同断、西浜野合え出で候二か所木戸の内、本門院海（街）道え出で候木戸明けず申し付け候。

この法令は、三代藩主頼豊の死去に伴う措置で、高松城下の出入り口を閉じるよう命じたものである。同時に出された覚には、「町口五ケ所番所」と見えているから、城下町の出入り口は５カ所であり、そこには番所が置かれていたことがわかる。ただし、一項目目に見えるように、これらのほかにも出入り口はあったが、正式には５カ所とされていた。なお、四項目目に見える「野合」は野間（のあい）のことで野原のことである。

【図 12】は、ほぼ同時期に製作された城下図である。同図から番所と推定される家屋が描かれている場所を港の入り口などに設けられたものを除いて示すと、東御門から右周りに、①新橋のたもと、②塩屋町通りの南端、③田町口、④旅籠町の西端、⑤九番丁の西端、⑥摺鉢谷川の高橋のたもとの６カ所である。この６カ所について、ほかの絵図で確認してみる。まず、【図 15】高松市歴史資料館所蔵文化年間 (1804-18)「高松市街古図」には「辻番」・「辻番所」が記されている。新湊町などの港に設けられた番所を除くと、その場所は、②・③・④・⑥の４カ所である。香川県立図書館デジタルライブラリーの弘化年間 (1844-48)「高松城下町屋敷割図」には「番所」が記されている。港に設けられたものを除くと②・③・④・⑤・⑥の５カ所である。なお、鳥屋「御用留」（高松市歴史資料館所蔵）の嘉永５年 (1852)7 月 24 日条に見える同月の「御順道書」には、「新橋出口御番処（所）」が見え、当時、①新橋のたもとにも番所があったことが知られる。

「源懐様御代御令條之内書抜」に記された「五ケ所」出口は、①から⑥までのうちに含まれているとみてよいであろう。また、三項目目の「福田町南丁二ケ所木戸」のうち一か所は、おそらく②塩屋町通りの南端に設けられた番所、四項目目の「西浜野合（間）え出で候二か所木戸」のうち一か所は⑤九番丁の西端の番所をそれぞれ指していよう。このように藩からの命で城下の出入り口が特定されている理由は、一項目目に「右の事郡奉行え申し合わせ置き候」と記されていることから明らかであろう。それは城下については町方に属し、町奉行の管轄、城下外については郷方に属し、郡奉行の管轄であったからにほかならない。従って、高松城下とはこれら５か所ないし６か所の出口で囲まれた地域が該当する。

江戸時代の編纂物の記事により、高松城下町の周縁部の拡大の様相について述べる。用いる史料は、いずれも高松藩士の著作で、香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵「小神野筆帖」（盛衰記）と公益財団法人松平公益会所蔵「消暑漫筆」である。前者の原本は存在しないが、筆者小神野与兵衛が死去する安永９年 (1780) の４年前までの記事があり、成立はそのころであろう。後者は松平公益会所蔵本のみ存在が知られており原本である。著者中村十竹の自序から天保８年 (1837) の成立であることが知られる。詳細は、添付のファイルで確認されたい。

「小神野筆帖」仁巻に次の記事が見える。

一、町並も東は今橋切りにて松島の家は一軒もこれなき由、西は柏野屋前の石橋切にて王子権現は野中に御座候。今の通り家数も増し申し候事に候。
一、大手と申すは塩屋町・田町・西浜三か所にて御座候。昔の形にて今もって大手三か所にて、さらしものこれ

ある節、田町は古の出口中下馬にてさらし、西は柏野屋前にてさらし申候。田町も下馬より先は連々建て延び申し候。昔田町中下馬にてさらし候所、中古田町出口にてさらし候。

この記事に対して中村十竹は「消暑漫筆」で、次のように批判している。

十竹曰、彼（小神野与兵衛）が記する所、委細を知らずして記せるにや。その誤り少からず。東は松島にも、他の如く立ち続きたる人家はなけれども、この際に人家はあり。一家もなしと云うは誤りなり。又は柏野屋前の石橋切りにて王子権現は野中にありと云うも誤りなり。この頃右石橋より東は今の西新通町の分、両側東の突きあてまて皆侍屋敷なり。町家は一軒もなしにて、右の石橋より西は柏野屋の前より王子権現の門前通西へ突きあて、南は金光院屋敷の御座候。北は今の権現西横手裏門の西手、東向の町家の分、北の角まて今の通西通町なり。因て権現は町中なり。野中にてはなし。権現の北うらも今の通町なり。権現の裏門の通りより西への往還にて、今の通の道にて、この道より北手は木蔵町と云、町家は一軒もなしにて、それより北今大久保金左衛門・柘植栄之介・近藤登屋敷より西は愛宕の際までの屋敷は一軒もなし。蓮花寺より西南の方皆畑なり。愛宕の祠は原野中にありたるなり。光端（小神野与兵衛）が権現祠は野中にあつたと云うは愛宕の祠と取り違えたる物語を聞き誤りたるにやと思はるなり。又さらし者の場所、東は塩屋町二町目南のはつれ、木戸の内なり。これ昔の棒はな也、木戸より外橋本屋前より東は漸々に建ち家続きたる也。この辺古来郷分にて、郷方支配なりしか、文政十一(1828)子年十一月廿日町方支配地に相成る。右の木戸より外を当時は塩屋町三丁目と唱へしとぞ聞し。

小神野与兵衛のいう「大手」３か所塩屋町・田町・西浜とは、城下への出入り口のことである。街並みは東は今橋、西は「柏野屋」前の石橋であり、現在錦町にある王子権現は野中にあったという。また、さらし者のあるときは、田町は以前の出口である中下馬でさらしたが、田町が南へ延びたので、その後、田町の出口でさらすようになった、西は柏野屋前でさらしたという。これに対し中村十竹は、東の松島にも人家はあったこと、柏野屋の西には侍屋敷があり、王子権現は町中にあって、与兵衛はさらに西にある愛宕神社と取り違えていることを指摘し、与兵衛が記していない塩屋町のさらし場は同町の二丁目のはずれ木戸の内にあったことを補足する。

ここに見られる両者の認識の差は、おそらく与兵衛と十竹が記述の対象としている時期の違いから生じたものであろう。両者の記事に見える「柏野屋」とは、「穆公外記」延享４年(1747)9月条などに見える高松藩の綿総問屋柏野屋のことであろう。「消暑漫筆」には柏野屋前の石橋について「右石橋より東は今の西新通町の分、両側東の突きあてまて皆侍屋敷なり」・「石橋より西は柏野屋の前より王子権現の門前通西へ突きあて、南は金光院屋敷の御座候」と見えている。【図15】文化年間「高松市街古図」の西新通町の箇所を参照すると同町の西の端に橋が描かれている。柏野屋があったのはここであろう。この付近までが城下であった時期は、城下図でいえば、頼重期の状況を描いた【図11】が時期的な下限である。生駒期より城下は南方へ広がっており、南新町付近が描かれている。与兵衛の記すかつてのさらし場「古の出口中下馬」は、「高松市街古図」によれば、南新町と田町の間に位置した。かつての南新町からの出口である。ここから南へ田町が延びたのである。また、「小神野筆帖」には、「御先代町絵図御屏風在之。表坊主頭預ル」との記事があり、与兵衛は「高松城下図屏風」の存在を知っていた。与兵衛が描写を試みたのは、頼重期の城下の様子である。

それに対し、十竹は現状から反論を加えている。前出の文化年間「高松市街古図」は、十竹が「消暑漫筆」を執筆する以前に製作されたものである。城下西部の愛宕神社の東側には「大久保金左衛門」・「柘植栄次郎」・「近藤登」の屋敷があり、十竹が「大久保金左衛門・柘植栄之介・近藤登屋敷より西は愛宕の際までの屋敷は一軒もなし」という状況は、同図よりさほどさかのぼらない時期のことである。両者の記述は、各種の城下図から得られる情報と突き合わせて、時期を絞って用いるべきであろう。

おわりに

以上の検討の結果を図示するため、次頁に掲げる【図16】高松城と城下町を作成した。昭和３年の地形図を用いて高松城下の構造を示したものである。城下町の範囲を知ることができよう。

なお、田中が作成した写図については、著作者名を明示すれば、利用にあたって許諾を得る必要はない。今後の研究に活用されることを期待する。

第 16 図　高松城と城下町

第 3 節　分布調査からみた生駒山の石切丁場

坂本　俊 (公益財団法人元興寺文化財研究所)

はじめにー研究史と調査の経緯ー

大坂城の石垣に生駒山から切り出された石材が用いられていることは、大坂城再築普請の経過や内容に関わる文献史料にある「飯森」の記述から早くから指摘されていた。「飯森」は、三好長慶の居城で石垣を各所に構築する飯森山城が位置する地域一帯であり、大坂城に面する生駒山北部西斜面が石切場の有力候補地であった。そのような中で、石垣石材や残石に付されている刻印の調査を行っていた藤井重夫氏は、昭和 45 年（1970）に日下・善根寺、飯盛方面に石切丁場が存在する可能性を指摘し（藤井 1970）、のち昭和 58 年（1983）にゴルフ場と車谷を隔てた南側の窪地に位置する「中垣内飛地石切場跡」を発見した（藤井 1983）。しかし、この段階の研究は刻印を対象としていたため、遺構や矢穴技法など考古学的な視点や情報が不十分であった。

その後、昭和 60 年（1985）にはゴルフ場の改修工事に伴い、大阪府教育委員会が分布調査・試掘調査を実施した結果、周知の埋蔵文化財包蔵地「石切場跡」として登録され、昭和 62 年（1987）と平成 2 年（1990）、平成 4 年（1992）には大東市教育委員会によって「石切場跡」の事前発掘調査が実施されている（大東市教育委員会 1989・2012）。しかし、それ以降の調査研究は低調で、近年まで築城史研究会や藤井重夫氏の研究成果をもとに語られることがほとんどであった（岸本 2009、早川 2014）。

平成 18 年（2006）、藤井氏らが行ってきた研究の課題を引き継ぎ、生駒山に所在する石切丁場の全貌を明らかにするために行政職員や OB・OG、学生を組織した民間団体である残念石研究会（代表：三宅正浩）が発足した。石切丁場の広がりと分布を悉皆的に踏査し、先行研究で不足していた考古学的情報を補うため、石材や遺構の記録化を進めた。筆者は途中からの参加ではあるが、令和 2 年（2020）まで基礎調査を継続し、令和 3 年（2021）8 月に報告書を刊行するに至った。本稿は、これまでの活動を概括し、分布調査で明らかになった生駒山の石切丁場の一端を明らかにすることを目的とする。

1. 石切丁場の認定と条件

1-1. 調査を行うための基本情報

分布調査では、散在する石材や地形などから石切丁場であると的確に認識する必要がある。藤井氏らが行ってきた調査では、「刻印」が石切丁場を認定する指標であった。刻印は、採石から石垣を構築するまでの諸段階に彫られ、分類すると 18 類型を数える（築城史研究会 1977）。刻印は石切丁場の帰属大名などを推定するうえで有効であるが、それは徳川大坂城などの近世城郭に対してであり、中世や織豊期城郭の石垣石材にはそもそも刻印を付さないものが基本とする点には注意が必要である。

刻印以外に石材を切り出した痕跡を示すものとして、矢穴技法がある。矢穴技法は、鉄製ないし木製の矢を石目に沿って開けた矢穴に挿入し、セットウで矢を敲打することで矢穴に負荷を与え、引き裂くように石材を分割する方法である。日本列島においては、12 世紀末頃に南宋から伝来したと考えられており、近代になって発破の利用や機械化が進むまで石材分割の基本技術であった（佐藤 2019）。この矢穴技法について、基本的な型式編年を構築したのが森岡秀人氏と藤川祐作氏である（森岡・藤川 2008・2011）。これを参照することで、ある程度の年代推定が可能である。

矢穴技法の変遷については、矢穴の法量に着目した三瓶裕司氏の研究（三瓶 2010）、矢穴の間隔に着目した金子浩之氏の研究などもあり（金子 2010）、様々な視点から分析が試みられている。また、近年では甲府城や高山城、肥前名護屋城、中津城、府内城などの事例研究も蓄積されつつある。

石切丁場の分布調査を行う際、効率的な発見にはある程度の立地の見当をつける必要がある。森岡秀人氏と天羽育子氏は、東六甲採石場の発掘調査の成果を踏まえ、沢占有型の石切丁場や尾根上に立地する石切丁場等 6 類型に分類した（森岡・天羽 2009）。各地の石切場の地形等の条件によって様々なパターンが存在すると思われるが、分類は一つの目安になると思われる。

1-2. 生駒山での分布調査の場合

生駒山での調査は、既往の調査・研究がある「中垣内飛地石切場跡」での個別残石の図化や平板図を作成し、石切丁場の遺構全体を把握することから始めた。その後、範囲を広げて踏査するにあたっては、17 世紀前半に技術的な平

準化をみるＡタイプの矢穴型式によって分割された残石の確認に主眼を置き、刻印、採石土坑などをメルクマールに徳川大坂城との関連を模索しながら調査を行った。また、近世後期以降に主に確認できるＢ・Ｃタイプの矢穴型式で分割された石材についても、普請後の周辺地域における採石活動や石材利用のあり方を示すことから重要視し、位置関係の把握を進めた。

踏査する中で採石に関わる痕跡を発見すると、①遺構の範囲、②どこに石材を供出した石切丁場なのか、③石切丁場の帰属大名などの検討が必要である。生駒山の場合は、刻印の存在と「中垣内飛地石切場跡」が先行研究で知られていたため徳川期大坂城との関係を見出しやすかったが、消費地に分布する石材との比較を通して、発見した石切丁場の位置づけを行うことが重要である。

2. 生駒山の石切丁場の立地と分布

生駒山地は、南北約 30Km にわたって連なっている。生駒山（標高 642.3m）を主峰とし、北は飯盛山（標高 314.3m)、南は信貴山（標高 437.0m）が聳え、山地岩体の大部分が領家帯花崗岩類で形成された花崗岩地形を呈する。表層は花崗岩類が風化して形成されたマサによって構成されるが、花崗岩の岩壁や節理に沿って大小の様々な割れを有した露岩が点在している。

石切丁場は、大坂城に相対する生駒山地北部の西側斜面に位置している。西側斜面の地形は、生駒断層崖で限られて急斜面となっており、小規模な低位段丘と宮谷川・野崎中川などの中・小河川が流下する。山麓は複合扇状地を形成し、現在その西方は河内平野が広がっているが、徳川大坂城再築普請の段階では、旧河内湖に由来する深野池や新開池、大和川とその支流である吉田川や恩智川、菱江川などの河道が発達した流域を形成していた。

「中垣内飛地石切場跡」の調査を端緒として分布調査した結果、南北長約 4.5km、東西幅約 2.5km の範囲に 19 か所の石切丁場跡を確認することができた（第１図）。残念石研究会では、石切丁場のまとまりを大字（旧村）ごとに捉えて地区とし、北から南野（四條畷市)、北条（大東市)、野崎（大東市)、寺川（大東市)、中垣内（大東市)・善根寺（東大阪市)、龍間（大東市）として整理した。個々の石切丁場の呼称は、この地区名称の後にアルファベッドを付すことで区別し、総称は立地を踏まえて「徳川大坂城生駒山地西斜面石切丁場跡群」と呼称することとした。

3. 石切丁場の概要

3-1. 龍間Ｂ地点の構造と技術的特徴

分布調査の端緒とした「中垣内飛地石切場跡」は、前述した名称設定により龍間Ｂ地点に言い換えることとなった。調査により、生駒山地西斜面石切丁場跡群では最大規模の石切丁場であることが判明し、近世と近代の採石遺構が隣接して位置することが明らかになった。刻印から堀尾山城守の石切丁場と想定される（註 1)。

遺構は標高 280 ～ 300m の河道南方の斜面一帯に広く展開しており、矢穴石や割石からコッパ石、搬出直前に放棄された石材など多様な残石を確認している。地形の様相と石材分布からⅠ区からⅣ区に分けることができる（第 2 図)。

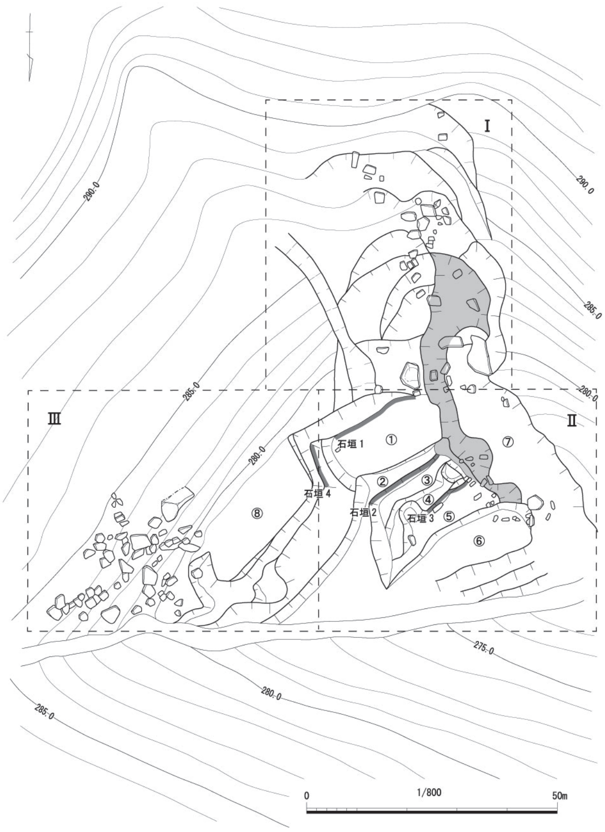
Ⅰ区：自然石に矢穴を穿った状態の残石が多く分布する地区。近世の採石時の様相を残しており、搬出直前まで加工が進められた石材もある。

Ⅱ区：近世の残石を再利用して平坦地を形成し、雛壇造成がなされている地区。一帯に石材分割途中の残石や搬出途中の残石、「分銅」と「輪違い」の刻印が確認できる。平坦地⑦には多量のコッパ石を確認しており、近代にも採石活動を行われ

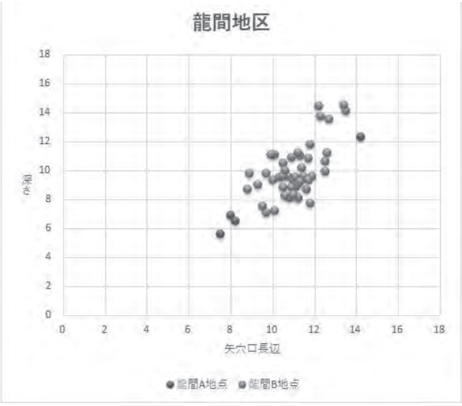
1 北条Ｂ　2 北条Ａ　3 北条Ｃ　4 野崎Ａ　5 野崎Ｂ　6 寺川Ｅ　7 寺川Ｆ
8 寺川Ｂ　9 寺川Ｄ　10 寺川Ｃ　11 寺川Ｇ　12 寺川Ａ　13 寺川Ｈ　14 寺川Ｉ
15 中垣内・善根寺Ａ　16 中垣内・善根寺Ｂ　17 龍間Ａ　18 龍間Ｂ　19 龍間Ｃ

① 市場川　② 宮谷川　③ 権現川　④ 谷田川　⑤ 野崎中川　⑥ 立花川　⑦ 廿田川　⑧ 寺川中川
⑨ 鍋田川　⑩ 南川　⑪ 大川　⑫ 日下川　⑬ 恩智川

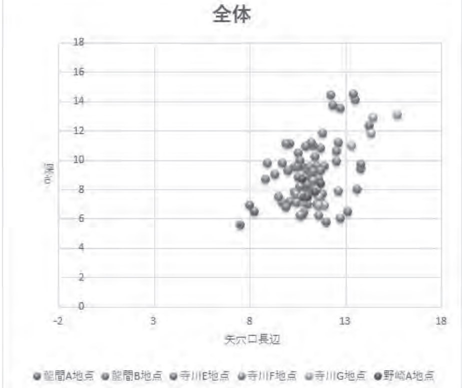
第１図　生駒山に所在する石切丁場の分布



第２図　龍間Ｂ地点の様相



第３図　龍間地区における矢穴寸法散布図



第４図　主要地区における矢穴寸法散布

ていたと考えられる。

Ⅲ区：未調査地区。平坦地を中心に、転石が多数分布。Ａタイプの矢穴は確認しているが、製品に相当する石材は未確認。コッパ石が多くあり、近代を中心とした採石遺構の可能性がある。

Ⅳ区：Ⅰ～Ⅲ区の東方尾根に位置する削平が未熟な平坦地に「分銅」の刻印を付した運び出し直前の残石が一石認められる。刻印の様相から龍間Ｂ地点の範疇に含めたが、Ⅰ～Ⅲ区より標高が高く距離があるため、さらなる検討が必要である。

龍間Ｂ地点で確認できた矢穴は、森岡・藤川編年におけるＡタイプとＣタイプで、後者は近代の採石遺構で確認できる。Ａタイプの矢穴を対象に寸法を計測したところ、矢穴口長辺 10 ～ 12.6 ㎝、深さ 8.1 ～ 11.8 ㎝の範囲に集中的にプロットされ、このまとまりが龍間Ｂ地点で中心的に用いられた矢穴といえる（第３図）。しかし、矢穴口長辺 12.2 ～ 13.5 ㎝、深さ 13.5 ～ 14.5 ㎝にもまとまりが確認できるように、前述した矢穴より幅が大きく、深く穿たれた矢穴も利用していることが分かる。つまり、複数種類の矢を利用していたことを示しており、石材の大きさや分割の段階に応じて矢・矢穴を使い分けていたと考えられる。

3-2. 矢穴技法の多様性

慶長期に出現するＡタイプの矢穴は、ソコウチノミやテッカノミの使用により側壁・矢穴底を丁寧に調整し、一定の規格性を持つ。このＡタイプの矢穴が元和・寛永期に定着し、石切丁場の形成と様々な種類の矢穴を区別した採石方法が揃うことで、採石・加工技術が平準化したことを示している（坂本 2019）。Ａタイプの矢穴は規格的な形態であるとはいえ、寸法や形態にバリエーションが存在することが分かっている。矢穴は道具を介して石材に彫られるため、形態的な偏差は常に存在しているが、一つの矢穴列を構成する個々の矢穴の縦断面や横断面の形態を重ね合わせると、その平均的な形状が矢穴列間で一致しない場合が確認されている。この形態的な差は、職人差や石垣普請に従事した大名の技術的な差の可能性が指摘されている（高田 2015・2016・2019）。

一方、生駒山の石切丁場の調査する中で、矢穴の寸法を地区ごとに比較したところ、プロットのまとまりがそれぞれ異なっていることが明らかになった（第４図）。計測対象は規格的な形態を持つＡタイプの矢穴であり、形ではなく法量の違いであることを考慮すると石材分割に用いる矢の寸法が石切丁場ごとに違いを持っているということになる。つまりこれは、各丁場で採石に従事する石工集団が用いる道具の差を示していると考えられるのである。技術が

平準化したとは言え、矢穴の寸法や形態に少なからず特色が現れることが明白となった。刻印や矢穴の形態差なども含め、総合的に検討することで石工の技術的な特徴を集団単位で明らかにできる可能性がある。生駒山の石切丁場では、さらに追加的な調査を継続して行う必要がある。

4. 石材の運搬ルートについて

生駒山の石切丁場群が、大坂城に面した西側斜面に展開していることは前述したとおりである。より詳細に見ていくと、その多くが谷筋に面した斜面地に形成されていることが分かる。石材の「山出し」は、斜面を運び上げるより、谷底まで降下させて谷の緩斜面を利用する方が安定的な運搬を可能にすると思われる（写真1、註2)。生駒山の石切丁場では、運搬ルートとなりえる主要谷筋を各石切丁場が共有しているように想定できる。寺川地区では、この特徴が顕著に見られる。

寺川地区では、「□に「丹」」や「曲尺」などの刻印が確認されており、京極丹後守の石切丁場が展開していたと考えられる。運搬ルートとしては、斜面を運び上げたとしても山麓に繋がるルートは見受けられないため、谷筋を利用した可能性が極めて高い。各石切丁場から切り出した石材は、主要谷筋に向かって斜面を滑走させ、丁場が同時期に稼働していた場合には谷底で合流しながら山麓まで運搬していたと考えられる。その後、河内平野にかつて存在していた深野池や新開池、河川の水運を利用して大坂城に運搬したと想定できるが、どこから「浜出し」したのかが問題になる。

筆者は、『大坂城代青山下野守家来御石役書留』（大阪府立中之島図書館蔵）のうち『御石員数寄帳』の分析から、大坂城再築普請の際に各地の石切場から大坂城までの石材運搬経路について検討したことがある（坂本 2016)。分析対象とした史料は享和2年（1802）に作成されたものだが、角石や築石などの石垣構築に関わる石材とその員数、所在する場所と所有者が記されており、いずれの所有者も大坂城再築普請に動員されるなどの共通点を持っていた。つまり、この史料は大坂城再築普請で各地の山中や市中に残された石材の管理台帳であり、寛永6年（1629）に大坂城の完成を見た後、享和2年（1802）まで継続的に残石管理をしていたことが分かる。この史料の中に、野崎村と北條村の記述があり、両村の深野池沿岸に石材の積み出し地が存在していたと推定された。深野池は、宝永元年（1704）の大和川付け替え工事に伴って水位が減少し、新田開発が行われたために大きく地形が改変している。そのため、具体的な積み出し地の特定までに至ることができないが、深野池沿岸を示す地名として地図にみえる小字「濱」がその有力な候補に挙げられる。

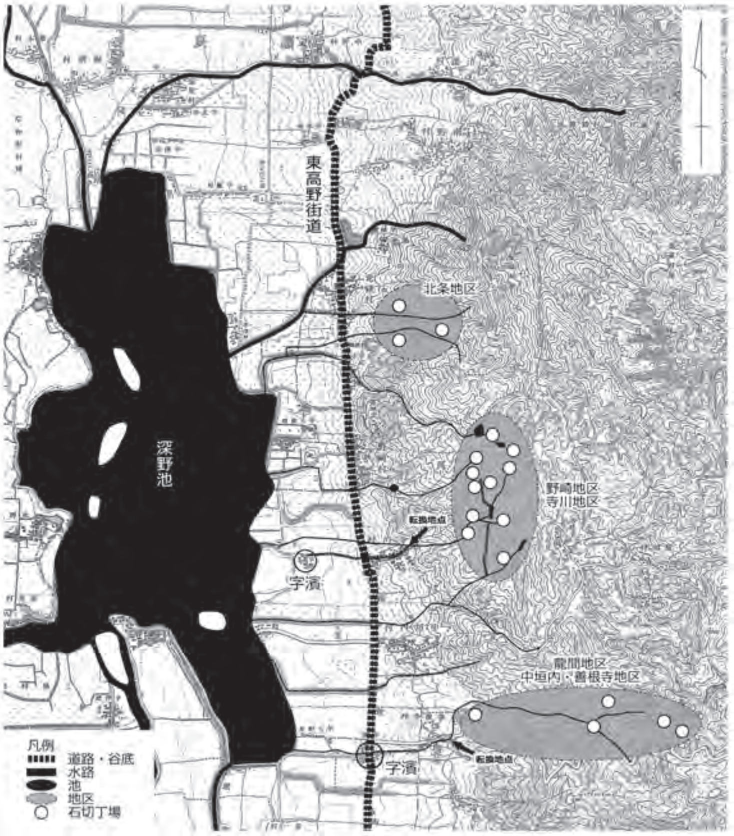
小字「濱」は、山裾から約800ｍ西に位置していることが分かる。山出しルートの主要谷筋は、深野池に向かって直線的に伸びて山麓で河道となっているが、河道を運搬し船積みするには地盤などの制約が大きい。そのため、山麓では谷筋・河道ではなく陸路に転換して約800ｍの距離を運搬したと想定できる。このような運搬方法の転換は、山麓から海岸部まで約2㎞の距離がある東六甲採石場でも同様に行っていたと考えられる（坂本 2017・2021)。

深野池を利用した石材運搬の痕跡跡は、緑地校となっている深北緑地に分布する残石からうかがうことができる。そこに見える刻印構成は、石切丁場で確認した刻印と異なるものもあり、今後の調査課題である。

写真1　斜面を降下する石材（龍間B地点Ⅱ区、石材21・22他）

おわりに

最後に、生駒山に所在する石切丁場の特徴を示したい。瀬戸内の島嶼部に所在しない石切丁場としては東六甲採石場が挙げられるが、その大きな違いは石切丁場の密集度にあると考える。東六甲では、刻印や地形のまとまりでグルーピングされる刻印群の中に、様々な大名が隣接して石切丁場を設けているのに対し、生駒山の石切丁場は点在傾向にあるのに加え、寺川地区では京極丹後守が谷筋を広く占有して採石活動を行っている。複数大名が石切丁場を設けているのは龍間地区であるが、A・B地点の２箇所のみで、東六甲のようには密集していない。これは、生駒山が岩盤や転石の露頭に濃淡があり、東六甲ほど石垣に用いるような石材を切り出すことが出来なかったためと考えられる。石材産出地の特徴に応じて石切丁場を設定し、より効率的な運搬方法を採用している様子がうかがえる。



第５図　想定される石材運搬ルート

さらに、龍間Ｂ地点を含め、全地区でＡタイプ以降の矢穴型式の変遷を追うことが出来ないことも特徴の一つである。つまり、近代にも採石活動を行っているが大坂城再築普請からの連続性はなく、一定期間の断絶ののち近代の石材需要に応える形で再び採石活動が行われているのである。この様相は龍間Ｂ地点で色濃く残っており、近世と近代の石切丁場が空間を一部重複しながら採石活動を行った状況が見て取れる。近代の採石対象が近世段階の残石に及んでいない背景には、『御石員数寄帳』などの史料や専応寺（大東市）にある京極丹後守寄進の手水鉢の存在から、徳川大坂城の石垣石材を切り出していた事実が伝えられていたことによる可能性もあるが、発破を用いた岩盤からの採石方法への変化が影響したと考えられる。この方法では近世の残石は規格外として採石対象にならなかった可能性があり、結果として遺構を残すことができたのだろう。

生駒山の石切丁場は、伊豆石丁場遺跡のように絵図や遺構など豊富な史資料を有しているわけではないが、近世から近代までの採石活動の様子がうかがえる稀有な遺跡といえる。近年の石材加工技術の研究や記録方法の発展を踏まえれば、さらに興味深い事実が明らかになると考えられる。今後の継続的な調査研究が肝要である。

謝辞

本稿は、令和３年１月16日に開催された連載講座「探求！たかまつ遺産」の発表内容・資料を基に作成したものである。コロナ禍の中、開催に尽力していただいた高松市文化財課の皆様と参加いただいた皆様に記して感謝申し上げます。

＜註＞

1. 同地区の龍間Ａ地点では「入れ子枡に枡掻き」の刻印を確認しており、同地区でも石切丁場の運営主体は異なっていたと考えられる。
2. 「山出し」は、山から材木・薪・炭などを運び出すことが本来的な意味であるが、石材に転じて用いたものである。「浜出し」は、港湾や土木関係で用いられる用語で、陸地から海上ないし船上に積み出すことを指す。坂本2016では、これらの意味が若干混乱しており、「海出し」としている部分が「浜出し」となる。

＜引用・参考文献＞

金子浩之 2010「石材矢割り技法の展開」（『芙蓉峰の考古学　池上悟先生還暦記念論文集』、池上悟先生還暦記念会）
岸本直文 2009「生駒山系の石切丁場」（『別冊ヒストリア 大坂城再築と東六甲の石切丁場』大阪歴史学会）
坂本俊 2016「大坂城再築普請における石材運搬経路の一考察」（『ヒストリア』第258号、大阪歴史学会）
坂本俊 2017「大坂城再築普請における石引道・石置場の復元と設置基準」（『淡海文化財論叢』第９輯、淡海文化財論叢刊行会）

坂本俊 2019「中近世移行期の採石・加工技術の諸相と技術平準化」(『中世石工の考古学』、高志書院)
坂本俊 2021「徳川大坂城の石垣に用いられた花崗岩採石地の諸特徴－石切丁場の分布による比較検討－」(『石のクロニクル－黒川信義さん古希記念論集－』、黒川信義さん古希記念論集刊行会・佐田岬みつけ隊)
佐藤亜聖 2019「中世採石・加工技術の諸相」(『中世石工の考古学』、高志書院)
残念石研究会 2017『龍間の石工用具と石材業－生駒山地西斜面における石材業の調査－』
残念石研究会 2021『生駒山地西斜面石切丁場跡群の研究－大坂城再築普請における生駒山石切場跡の考古学的調査－』
大東市教育委員会 1989「石切場跡の調査」(『大東市埋蔵文化財発掘調査概報 1987 年度』)
大東市教育委員会 2012『石切場跡発掘調査報告書－徳川大坂城再築工事関連の石切場跡調査－』
高田祐一 2015「採石痕跡の三次元計測による作業編成の復元」(『奈良文化財研究所紀要 2015』、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)
高田祐一 2016「採石・加工技術研究における研究方法」(『第３回中世採石・加工技術研究会発表資料集』、中世採石・加工技術研究会)
高田祐一 2019「矢穴研究の方法と可能性」(『中世石工の考古学』、高志書院)
築城史研究会 1977『大坂城石垣調査報告書其ノ一』、日本古城友の会
早川圭 2014「飯盛山」「龍間石切場跡」「日下石切場跡」(『織豊期城郭の石切場』織豊期城郭研究会)
藤井重夫 1970「大阪城の石切場」(『大阪城今昔』日本城郭資料館出版会)
藤井重夫 1983『摂津　大坂城（七）－生駒山系の石切場について－』
三瓶裕司　2010「矢穴法量の変遷について－伊豆・箱根系安山岩の矢穴から－」(『神奈川考古』第 46 号、神奈川考古同人会)
森岡秀人・天羽育子 2009「丁場類型によりみたる花崗岩の石切場」(『考古学の視点 兵庫発信の考古学 間壁葭子先生喜寿記念論文集』、間壁葭子先生喜寿記念論文集刊行会)
森岡秀人・藤川祐作 2008「矢穴の型式学」(『古代学研究』第 180 号、古代学研究会)
森岡秀人・藤川祐作 2011「矢穴調査報告」(『額安寺宝篋印塔修理報告書』、大和郡山市教育委員会)

図版出典

第１図・第２図・第５図：残念石研究会 2021 所収図面を縮小転載、
第３図・第４図：残念石研究会 2021 所収図面を一部改変して転載、
写真１：残念石研究会 2021 図版より転載。

第 6 章　活用事業の成果について

第 1 節　令和 3 年度事業の目的

令和 3 年度は故岩佐丈太郎氏採集資料の整理・公開を実施した。本資料は、岩佐丈太郎氏がこれまでに採集した考古資料である。本資料には高松市の古代寺院等に関係する資料だけでなく、讃岐国や阿波国の古代から近世にかけ寺院や窯跡等から採集された瓦類等の考古資料が多数あり、各遺跡の歴史的背景を考察する上で重要な資料であることから資料化し、公開するものである。資料は整理作業を実施し、遺物の実測拓本を作成し、実測図や遺物観察表は付録 CD に収納している。また、これらの成果資料は令和 3 年度連載講座等で使用・活用している。資料の評価は数ヶ年にかけて分析し、評価を実施する予定である。実測・拓本による資料化や連載講座等の資料として公開した。

第 2 節　寄贈資料の経緯

故岩佐丈太郎氏採集資料は、岩佐丈太郎氏が長年にわたり収集した瓦の資料である。岩佐丈太郎氏は、大正 7 年生まれ、平成 22 年没。御遺族の話によると、国鉄職員時代に同じ国鉄職員で徳島県内の瓦を収集されていた浪花勇次郎氏と知りあったことが、瓦収集の契機になったようである。当初は勤務地の徳島県内を中心に収集されていたようであるが、国鉄職員を退職後、新たに始めた仕事の関係から香川県内へ頻繁に来県することになり、その際、窯跡、廃寺等を巡って、香川県内の瓦も採集するようになられたようで、最終的に高知県を除く四国内の瓦を中心に収集されている。

平成 23 年度に御遺族から、これまでに収集した瓦の寄贈先について高松市歴史資料館へ御相談があった。当時の担当学芸職員が御自宅で収集された瓦資料を確認したところ、県内の主要な寺院の資料が収集されていることがわかった。さらに残りの良い資料が多く含まれており、瓦の展示等の今後の活用が見込めることから、高松市歴史資料館が受入れを行ったものである。

御遺族から寄贈を頂いた資料の内訳は収集した瓦、図録、拓本道具一式の合計 257 点である。

寄贈して頂いた資料を見ると、岩佐丈太郎氏が長年収蔵した瓦資料を大切に保管していたことが分かる。それは資料の大きさに合わせて収蔵用の箱を手製で作られていることや、石膏等での接合や文様の復元がされていることがうかがえる。また、資料の多くに採集時期や採集場所が記載されている。さらに、香川県の郷土史研究家で安藤文良氏と採集した瓦の交換を行う等、各地域の郷土史研究家と交流が図られた。

第 3 節　資料の概要

故岩佐丈太郎氏の寄贈資料は古代から近世の瓦塼類を中心に全 257 点であり、その内現代陶磁器等を除き、244 点を資料化した。資料には採集場所や採集時期等が記載されており、資料の蓋然性がある程度担保されていると考えられる。一方で、資料の所在地が不明な遺物もあるが、資料として掲載している。

採集した場所が判明した遺跡は旧国で讃岐国 34 遺跡、阿波国 32 遺跡、山城国 2 遺跡、淡路国 3 遺跡、播磨国 4 遺跡、伯耆国 1 遺跡、近江国 1 遺跡である。資料の採集された遺跡の年代は遺跡の構築・創建・築城当初の年代を基準とすると古代 54 遺跡、中世 13 遺跡、近世 8 遺跡、詳細不明 2 遺跡である。遺跡の種類は寺社 61 遺跡、窯跡 4 遺跡、城郭 5 遺跡、祭祀遺跡 6 遺跡、都城跡 1 遺跡である。採集した遺跡の多くが古代寺院や窯跡であり、古代を中心とした瓦塼類が大半を占める。遺跡の概要は遺物観察表に記載している。

讃岐国の瓦類で新たに資料が発見された遺跡や寺社仏閣は白羽神社、長尾宇佐八幡宮、多肥廃寺、琴平正明寺、平尾庵（現阿弥陀寺）、鐘撞堂跡（牟礼廃寺）である。

阿波国の瓦類で新たに資料が発見された遺跡や寺社仏閣は西原窯跡、安国寺、学谷窯跡、下浦廃寺、金光明寺（金泉寺）、金剛光寺、光勝院跡、国府観音寺天神社、矢野城跡、羅漢白田窯、梵天寺、天橋立神社、宇志比古神社がである。

これらの資料は高松市歴史資料館で保管している（令和 4 年 4 月現在）。

第４節　讃岐国分寺の東大寺式軒平瓦の特徴と出土傾向について

香川　将慶（高松市文化財課）

1. はじめに

以下の内容は岩佐氏寄贈資料をもとに令和４年３月６日第４回連載講座において発表した内容の一部を記載したものである。

岩佐氏の寄贈資料には讃岐国分寺の軒先瓦が含まれている。讃岐国分寺創建期の軒平瓦はこれまで東大寺式軒平瓦の影響を受けていることが指摘され、各研究者で年代観等の検討がされた（松本 2009、2013、渡部 2013a、妹尾 2017、香川・渡邊 2020）。一方、製作技法は、成形技法に関しては一枚づくりの導入時期等の検討がされているが、凹凸面等の整形技法の比較・検討はこれまで重点的な分析がなかった。今回は東大寺や西大寺等の寺院と平城宮で出土する東大寺式軒平瓦と讃岐国分寺で出土する東大寺式軒平瓦と文様や技法の比較と、讃岐国内で出土する東大寺式軒平瓦の分布の特徴等について記載したい。

2. これまでの研究について

(1) 平城京で出土する東大寺式軒平瓦の概要

東大寺式軒平瓦は「東大寺系」・「西大寺系」・「宮系」の３系統に分類され、凡その型式変化が示されている（第１・２図）。東大寺式軒平瓦は平城京 6732E・G 型式（東大寺系）が当初に成立し、その後平城京 6732J 型式から西大寺系の 6732N、宮系の平城京 6732A 型式へと派生する（第２図）。東大寺式軒平瓦は天平勝宝年間に成立したと考えられている（岩永 2001）。凹凸面の技法は、東大寺系に属する型式の多くが凸面を縦ケズリで、凹面は側面側に調整を入れる（廣岡 2018）。凸面や側面に布目痕が残るものがあり、製作技法は一枚づくりと考えられる。西大寺系の凹凸面の技法も凸面を縦ケズリ、凹面の側面側に調整を入れる（今井 2018）。一部の型式に技法の差異が見られるが、大勢として東大寺・西大寺系の軒平瓦は共通した技法で製作されている。一方、宮系東大寺式軒平瓦の凹凸面の技法は、凸面が縦縄叩きによる整形で、凹面が瓦当側を調整する（石田 2018）。東大寺系と西大寺系東大寺式軒平瓦と技法が異なり、宮系東大寺式軒平瓦は平城京所用瓦の流れを汲むものである。そのため、宮系東大寺式軒平瓦は文様は共有したものの寺院に所属する瓦工人の交流はなかったと考えられる。

(2) 讃岐国分寺で出土する東大寺式軒平瓦の概要

創建期に位置付けられる軒先瓦は軒丸瓦６型式、軒平瓦３種５型式である（香川・渡邊 2020）（第３図）。軒丸瓦の SKM05 は平城 6304 型式等に系譜が求められるが、そのほかの SKM01・02A・03・04・06 は在地系（丸亀市宝幢寺、まんのう町弘安寺）に系譜が求められる笵種である。

軒平瓦の文様系譜は SKH01A ～ C と SKH03・06 が創建期に位置付けられる。その内、SKH01A ～ C が東大寺式軒平瓦の影響を受けた笵種である [(1)]（第４・５図）。SKH03・06 は唐招提寺三彩瓦 605A の影響を受けていると考えられる。

SKH01 は製作技法や文様変化から SKH01A・01C が先に作笵され、SKH01B が次いで作笵された。まず、製作技法は SKH01A・C が桶巻作りで製作され、その後一枚づくりで製作されている。一方、SKB01 の技法が一枚づくりのみであるため、SKH01A・C の後に SKH01B が作笵されたことがわかる。文様も中心飾りが SKH01A・C は宝珠型で SKH01B は三角錘型で文様変化していることからも時期差があると考えられる。

凹凸面等の整形技法は SKH01A ～ C に一部に格子叩きが見られるが、各型式とも共通して凸面はケズリまたはナデ整形している。また SKH01A・C は凹面側面側に調整を入れるものが多い。

讃岐国分寺の東大寺式軒平瓦（SKH01）は府中・山内瓦窯跡（高松市・坂出市）で生産されたと考えられる（渡部 2013b）。讃岐国分寺跡・尼寺跡が主な供給先であるが、後述するように讃岐国府跡や山下廃寺等で出土・採集されている。

これまでの研究で讃岐国分寺の年代観については多くの研究者によって述べられ、各研究者で年代観が異なる。ここでは簡略的ではあるが、各研究者の創建年代を中心に瓦の年代観について触れたい。

まず、渡部氏は SKH01A の特徴が東大寺式の系統下にあると考え、文様意匠の特徴から天平勝宝年間（749 ～ 757）頃の東大寺式軒平瓦（6732E ～ G・J 等）まで遡らず、神護景雲年間（767 ～ 770）頃の西大寺系東大寺式軒平瓦（6732N・M・X 等）の影響を受けたと考えており、創建年代を 770 年頃と想定している。軒平瓦は SKH01A → 01C → 01B の

型式的変化を想定している。軒丸瓦はSKM01・03A → SKM02A・04 → SKM06 という変遷を考えており、SKM06 の年代を延暦初年頃（780年代前半）に位置づけた（渡部2013a）。

松本氏の変遷は、軒丸瓦はSKM01・03A・06（横置き型一本作り）→ SKM01・04（接合式）SKM02A・04 と変遷することを打ち出した。軒平瓦も文様の変化からSKH01A → 01B → 01C と変遷すると考えた。創建年代はSKH01 の祖型を天平文様に求め、横置き型一本作りの製作技法による軒丸瓦や平城京式鬼瓦等から天平12 年以前の造瓦技術が讃岐国分寺に導入されたと考えた。最新の見解としてはSKH01 が東大寺法華堂の八乾漆像の天平模様に由来し、法華堂の創建事情や讃岐国分寺･国分尼寺の造営に際して、中央から伝播した造瓦技術の変遷を受けた結果、天平9 年（737）の造仏の詔を受けて造営が始まったと推測している。（松本2009・2015）。

妹尾氏は製作技法や軒平瓦の顎の形状、笵傷の進行等の観点から分析した。その結果、SKM01A の技法は笵傷の進行から接合式から横置き型一本作りに変化したことを解明した。また、創建当初の瓦はSKM05・SKH06 の組み合わせと考え、文様や製作技法等から平城宮瓦編年をもとに天平勝宝末年頃、750年代の中頃と位置付けられると考えている（妹尾2017）。

筆者は軒丸瓦SKM01・04とSKH01A・Cを創建当初に位置付けている。平城京で東大寺式軒平瓦が採用された天平勝宝年間頃から創建と考えている（香川・渡邊2020）(第3図)。

(3) 平城京と讃岐国分寺出土の東大寺式軒平瓦との比較

まず、文様であるが、平城京6732型式と讃岐国分寺出土の東大寺式軒平瓦を比較すると中心飾り等文様が部分的に類似していることから、平城京の東大寺式軒平瓦の影響を受けて讃岐国分寺の東大寺式軒平瓦が成立したと考えられる。しかし、文様の展開や上下外区等の細部は異なることから、平城京6732型式の各型式の中から特定の型式を用いて讃岐国分寺の東大寺式軒平瓦が成立した可能性は低いと考えられる。

製作技法は、東大寺系と西大寺系の東大寺式軒平瓦と讃岐国分寺跡で出土する東大寺式軒平瓦（SKH01A ～ C）の凹凸面の技法が双方で凸面をヘラ又はナデ調整する。さらに、その内SKB01Bの凹面は側面側に調整を入れ、東大寺系と西大寺系の東大寺式軒平瓦の製作技法と酷似する。一方、宮系東大寺式軒平瓦と讃岐国分寺で出土する東大寺式軒平瓦は凹凸面の技法で共通点はない。讃岐国分寺の造営に際し、平城京から一枚づくりの技法や等に伴う技術交流があった可能性がある。文様や製作技法・平城京系鬼瓦の導入に伴い、平城京から技術が伝わったと考えられる。凹面の調整から特に東大寺系又は西大寺系の瓦生産に関わった瓦工人が、讃岐国分寺の東大寺式軒平瓦の生産に関わった可能性が推測されるが、讃岐国分寺跡で出土する他の型式との比較等はさらなる資料の検討が必要と考えられる [(2)]。

3. 寄贈資料に含まれる東大寺式軒平瓦の特徴と傾向について

寄贈資料には田村神社や山下廃寺の資料に東大寺式軒平瓦（SKH01）が出土している。いずれも讃岐国分寺跡で出土資料と同笵である（第5図）。ここでは寄贈資料の東大寺式軒平瓦の概要を触れたい。

第5図-1は田村神社で出土し、SKH01Bと同笵である。凸面はナデ調整で凹面は布目痕と調整1度が施されている。曲線顎である。焼成や胎土、調整の技法等の特徴が、讃岐国分寺で出土するSKH01Bと同様であることから、田村神社で出土した遺物は、讃岐国分寺跡の生産地である府中・山内瓦窯で生産されたと推測される。田村神社が文献資料にはじめて記載されるのは『続日本紀』嘉祥2年（849）2月28日であるが、当地では今回の寄贈資料をはじめ古瓦が採取されており、奈良時代末には田村神社が創建され、神社に伴う神宮寺又は付属する仏教施設が存在した可能性を指摘されている（渡部2013b）。

第5図-2は山下廃寺の資料はSKH201Bと同笵である。直線顎である。

そのほかに、これまでの調査や研究から讃岐国分寺で作笵された東大寺式軒平瓦は長尾寺（さぬき市）からSKH01Bが（渡部2013b）、讃岐国府跡からSKH201A・B・Cが出土している（松本2019）。また、創建期に採用された讃岐国分寺・尼寺の瓦類の分布状況は、讃岐国分尼寺KB101が始覚寺（三木町）、讃岐国府跡と同笵、下り松廃寺と同笵又は同文の瓦が採取されている。渡部氏は讃岐国分寺と同笵・同文の瓦が出土する寺院は讃岐国分寺・尼寺の造営に関与・協力した豪族の寺院であり、瓦や瓦笵の協力を受けたと指摘している（渡部2013b）。

4. まとめ

平城京で出土する東大寺式軒平瓦と讃岐国分寺で出土する東大寺式軒平瓦を比較すると、文様は平城京の東大寺式軒平瓦を模倣しているが、特定の型式を模倣したものではなく、東大寺式軒平瓦を参考に、讃岐国分寺で新たに作笵（デザイン）された瓦と考えられる。

また、製作技法は東大寺系や西大寺系東大寺式軒平瓦と、讃岐国分寺で出土する東大寺式軒平瓦には凹凸面の製作技法に共通項がみられる。作笵された際に平城京から工人の派遣の有無については、一枚づくりの技法が讃岐国分寺の造営に際して、導入されていることを考慮すると、その可能性が推測されるが、さらなる資料の検討等が必要である。

また讃岐国分寺で作笵された東大寺式軒平瓦は、SKH01A ～ C の内、SKH01B しか他の寺院等に波及していない。今後、新たな出土地・型式の瓦が確認される可能性も考えられるが、創建期の中でも若干後出の型式である SKH01B が他の寺院等に波及していることは、讃岐国分寺・尼寺の造営が一段落終えた後に瓦又は瓦笵の提供を受けた可能性がある。その背景は今後の課題としたいが、現状、渡部氏が指摘するように讃岐国分寺・尼寺の造営に関与した氏族の寺院に波及したと考えている。

調査に際しては以下の方々、機関に御協力を賜りました。記して感謝の意を表します。
今井晃樹、奈良文化財研究所

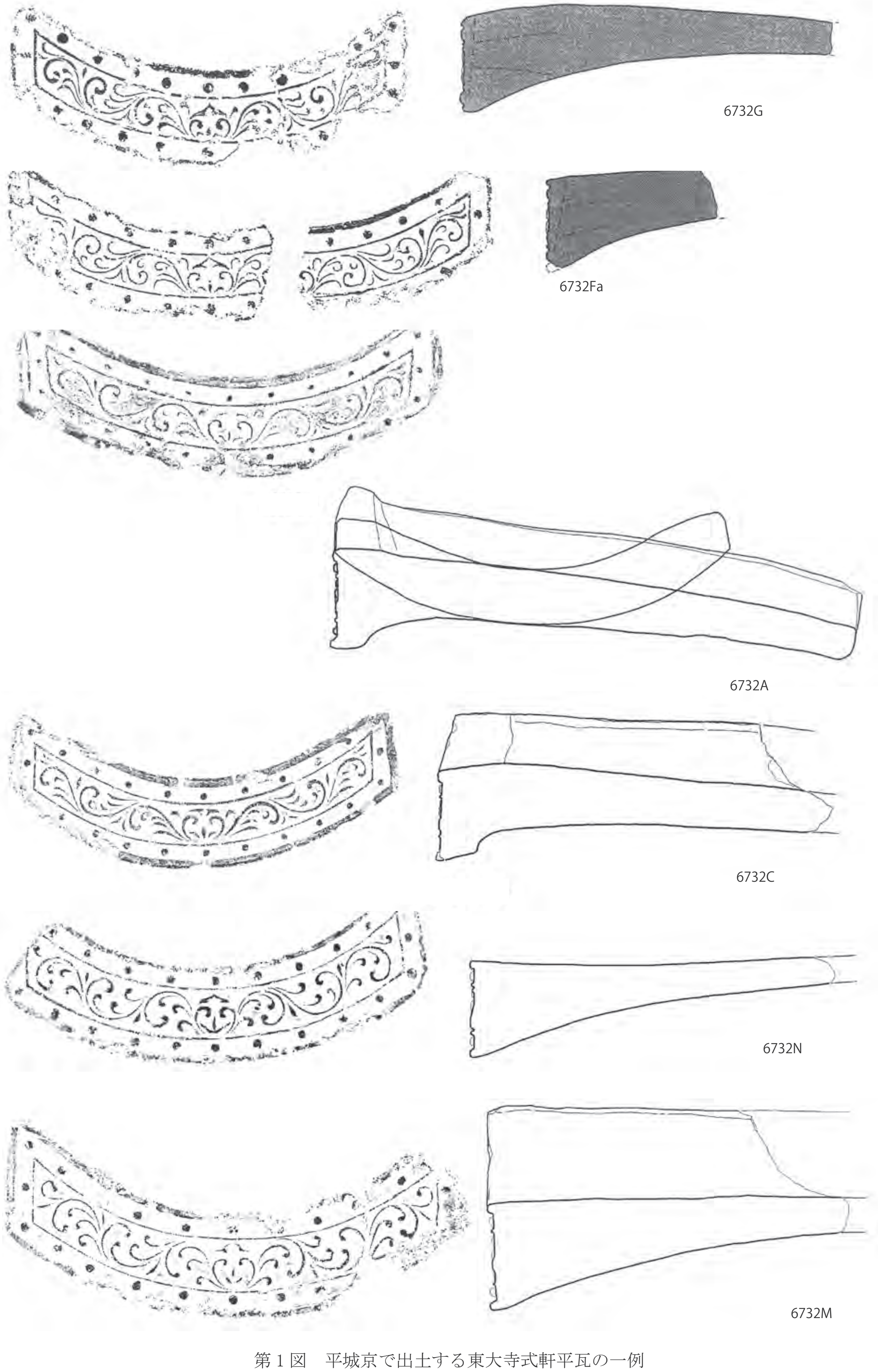
＜註＞

(1) SKH01D も東大寺式軒平瓦であり、SKH01A ～ C の系譜下にあるが、補修期に位置付けている（香川・渡邊 2020）。

(2) 平城京から工人の派遣等があった場合、讃岐国分寺の創建時期を考慮すると、東大寺系の工人が関与した可能性が推測される。

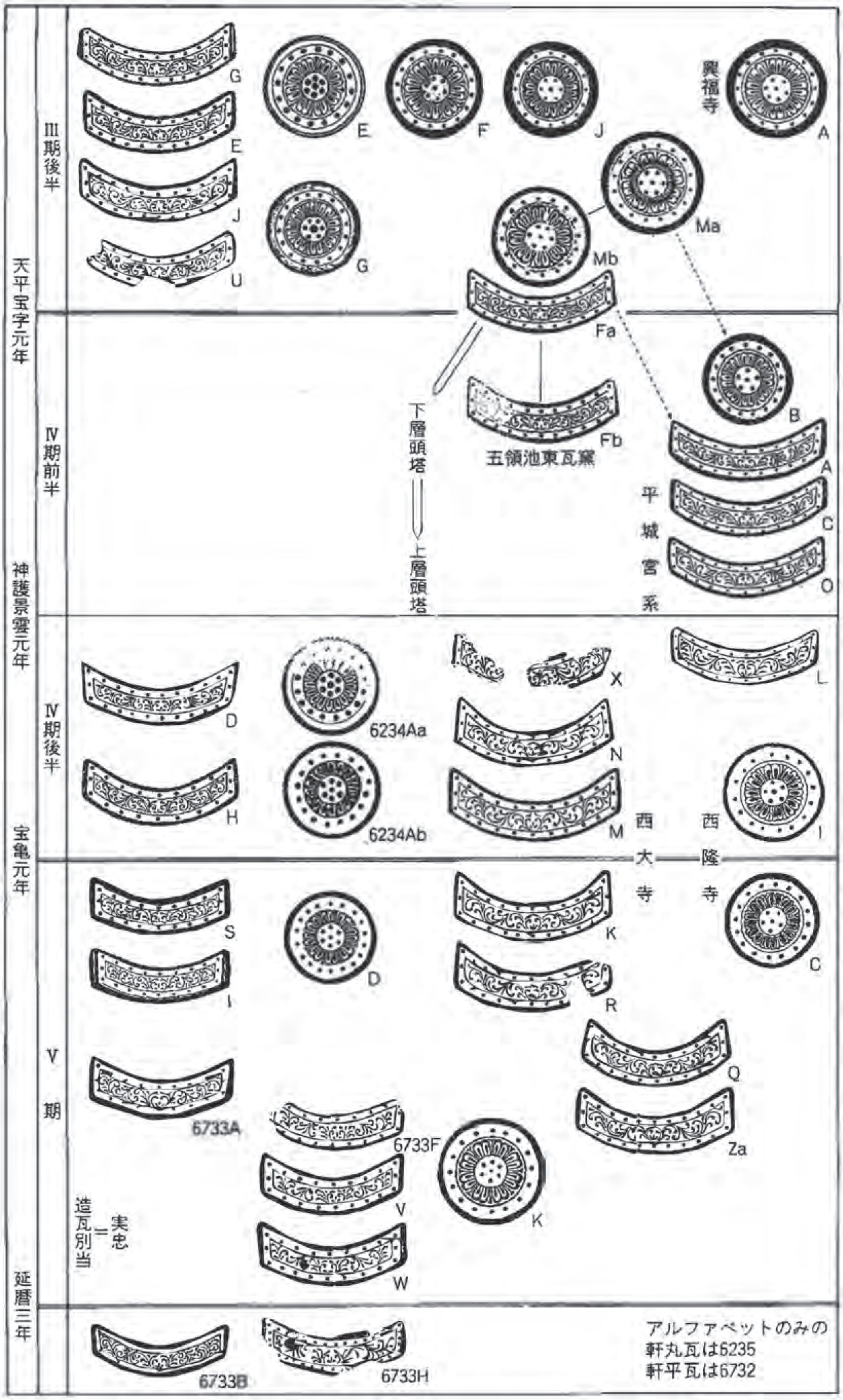
＜引用・参考文献＞

石田由紀子 2018「平城京の東大寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅷ』奈良文化財研究所
今井晃樹 2018「西大寺・西隆寺・興福寺の東大寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅷ』奈良文化財研究所
岩永省三 2001『史跡頭塔発掘調査報告』奈良文化財研究所
香川将慶・渡邊誠 2020『特別史跡讃岐国分寺跡Ⅰ遺物編②』 高松市教育委員会
清野陽一 2018「頭塔の東大寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅷ』奈良文化財研究所
妹尾周三 2017「讃岐国分尼寺の創建期軒瓦とその特徴について」『史跡讃岐国分尼寺跡－第 7 ～ 14 次確認調査』高松市教育委員会
奈良文化財研究所 2018『古代瓦研究Ⅷ』
廣岡孝信 2018「東大寺の東大寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅷ』奈良文化財研究所
松本和彦 2019『讃岐国府跡 2』香川県教育委員会
松本忠幸 2009「出土瓦から見た讃岐国分寺の創建」『仏教藝術』303 毎日新聞社
松本忠幸 2015「古代の讃岐国分寺・国分尼寺について」『仏教藝術』339 毎日新聞社
渡部明夫 2013a「瓦からみた古代の讃岐国分寺」『讃岐国分寺の考古学的研究』同成社
渡部明夫 2013b「讃岐国分寺に関連する古代の寺院・瓦」『讃岐国分寺の考古学的研究』同成社

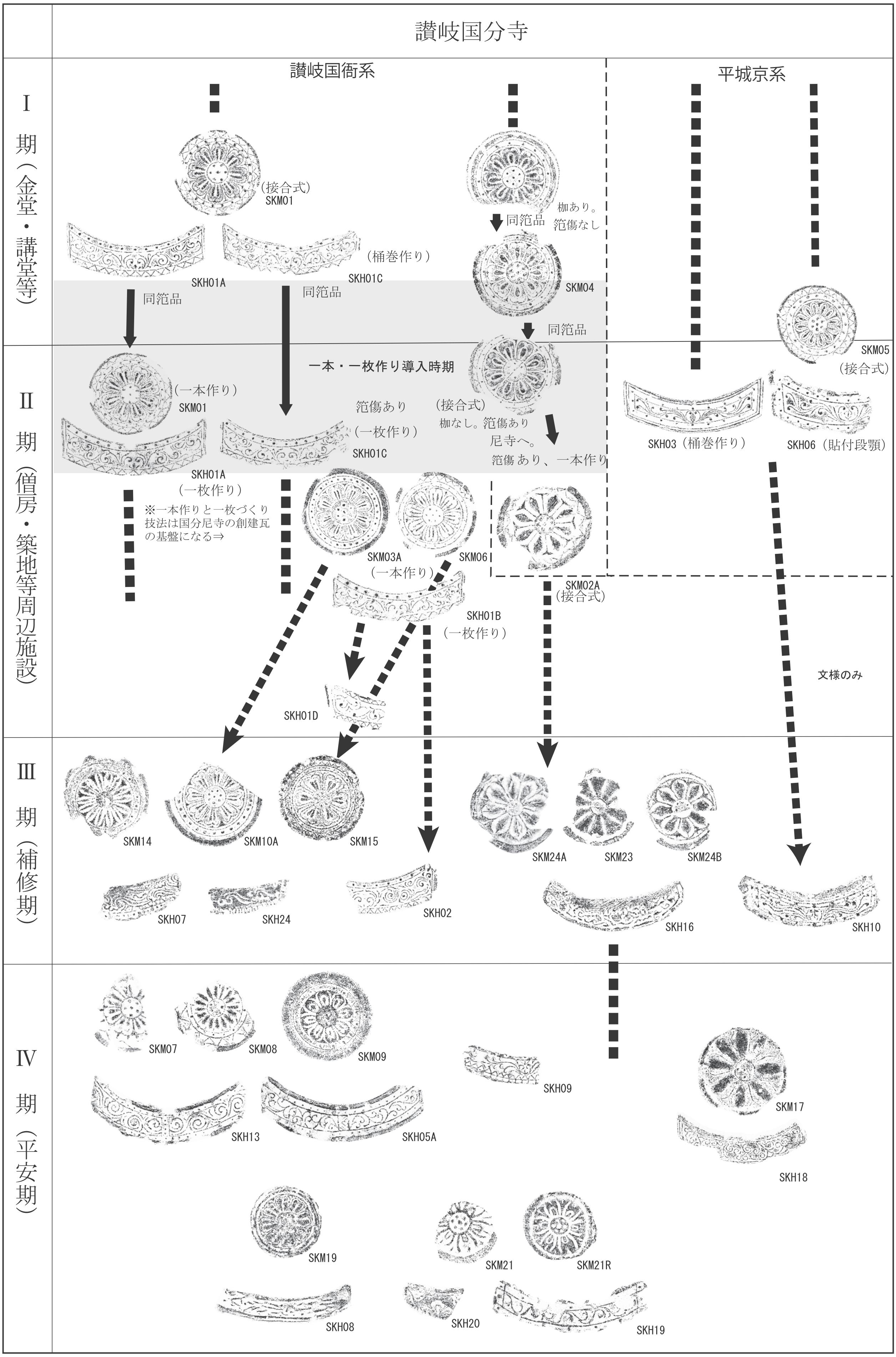


第１図　平城京で出土する東大寺式軒平瓦の一例

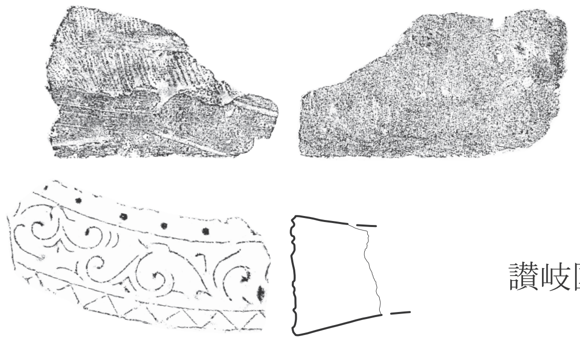
（今井 2018、石田 2018、廣岡 2018、清野 2018 を一部改変）（S ＝ 1/4）



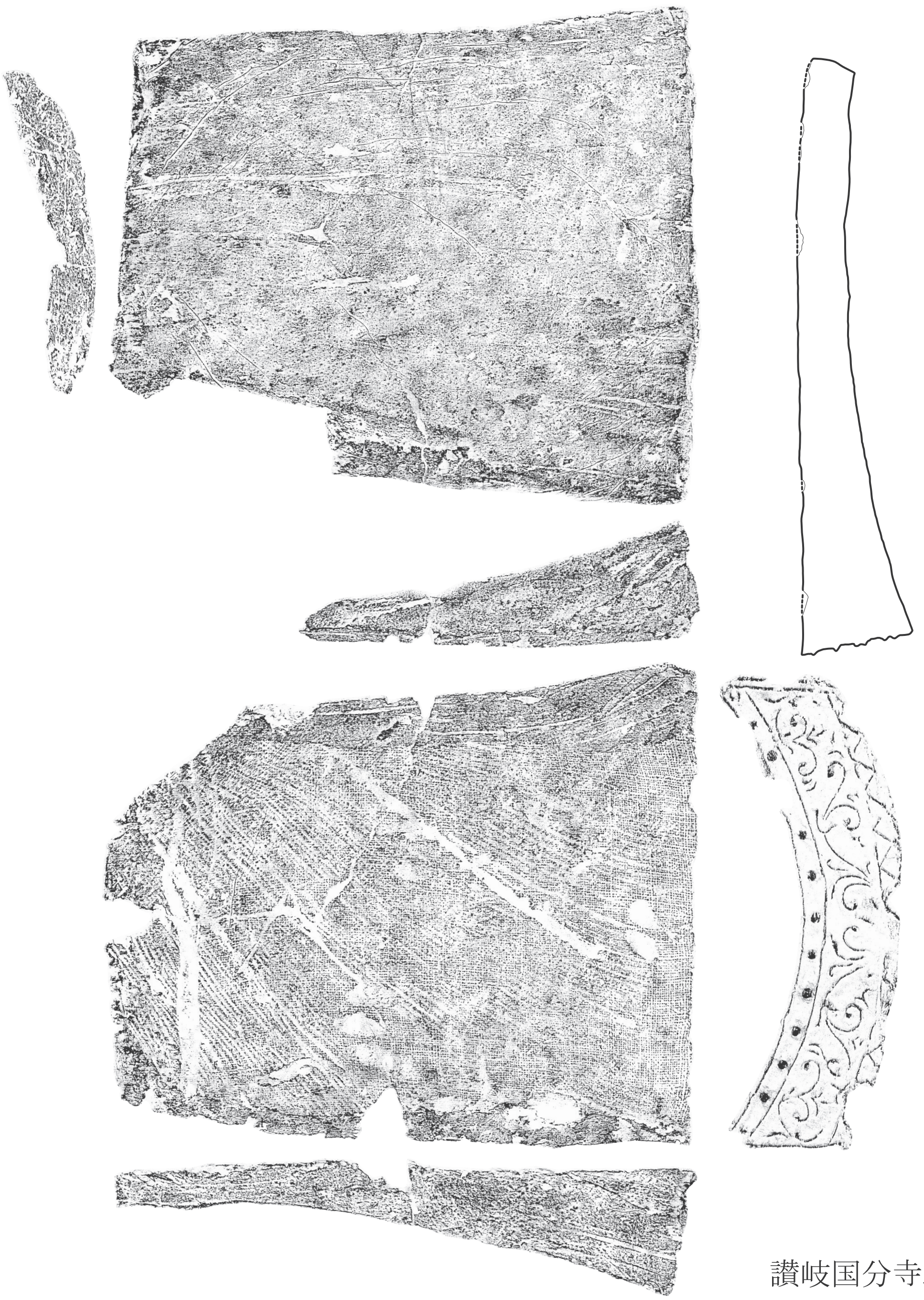
第２図　東大寺式軒平瓦の変遷（岩永 2001 より）



第３図　讃岐国分寺の瓦編年案（香川・渡邊 2020 を一部改変）

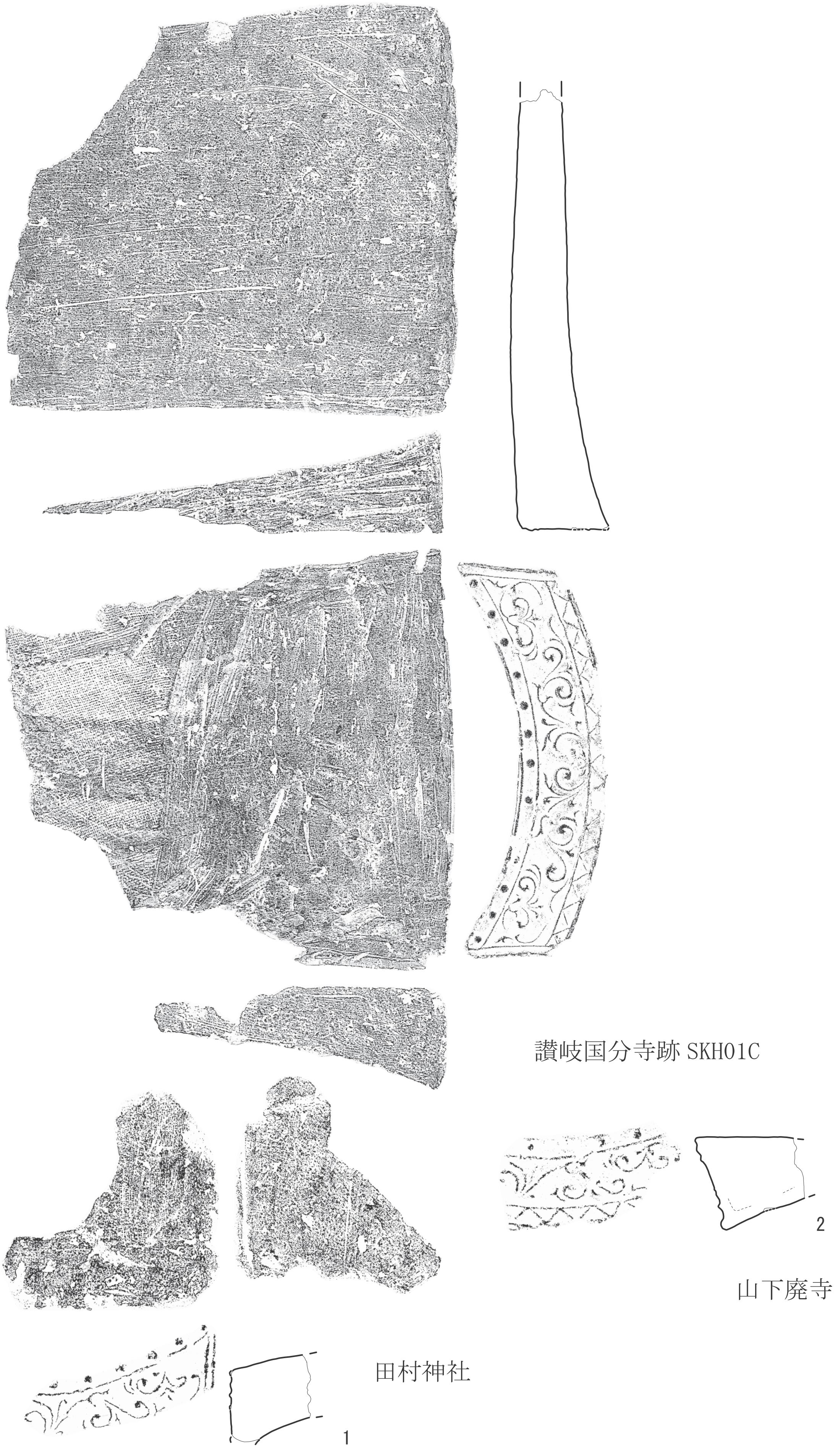


讃岐国分寺跡 SKH01A



讃岐国分寺跡 SKH01B

第 4 図　讃岐国分寺で出土する東大寺式軒平瓦（香川・渡邊 2020 より）（S ＝ 1/4）



第５図　讃岐国分寺で出土する東大寺式軒平瓦と他遺跡の同笵瓦（香川・渡邊 2020 より）（S ＝ 1/4）

第5節　阿波国分寺跡・阿波国分尼寺跡の出土瓦について

香川　将慶（高松市文化財課）

1. はじめに

以下の内容は岩佐氏寄贈資料をもとに令和4年3月6日第4回連載講座において発表した内容の一部を記載したものである。

岩佐氏の寄贈資料に阿波国分寺や阿波国分尼寺の軒先瓦が含まれている。文様や製作技法等の瓦の特徴が解明できるものが多く、瓦からみた阿波国分寺・尼寺の造営過程を検討する上で重要な資料である。そのため、講座に先立ち阿波国分寺跡・尼寺跡出土瓦や瓦生産に関与した古代寺院（石井廃寺等）の資料調査も実施した。寄贈資料の比較検討や瓦生産の様相を明らかにしたい。なお、寄贈資料で記載していないものは付録CDに収録している。

2. これまでの研究について

(1) 阿波国分寺跡・尼寺跡の瓦生産の概要

阿波国分寺跡・尼寺跡の瓦生産については既往の研究があり、その概要について記載したい（亀田1990、渡邊2014、岡本2014･2015)。創建期に位置づけられる軒先瓦は軒丸瓦6種7型式、軒平瓦3種6型式である（第1図）[(1)]。

軒丸瓦の系譜は、重圏文軒丸瓦2型式と複弁蓮華文軒丸瓦4種5型式が確認されている。重圏文軒丸1・2種は難波宮で主に使用された平城京6012E型式に系譜が求められ、阿波国外（他地域系）からもたらされた笵種である。圏線の太さによる文様の差異が認められる。複弁蓮華文第1類は1・2種にわけられ、常楽寺で出土する軒丸瓦の系譜である。在地系の瓦である。複弁蓮華文第2類は老司系と推測される系統で阿波国外からもたらされた可能性のある笵種である。複弁蓮華文第3種は石井廃寺と同笵の瓦である。在地系の瓦である。複弁蓮華文第5類は河辺寺跡で出土する瓦の系譜である。在地系である。単弁蓮華文系の型式も3型式確認されているが、これらの瓦類は創建期より一段階下る時期に位置づけられている。

軒平瓦の系譜は、重郭文軒平瓦4種6型式と均整唐草文軒平瓦1型式が確認されている。重郭文第1種1～4類は平城京6574A、重郭文2類は6572型式に系譜が求められる。これらの瓦も重圏文軒丸1・2種と同様に難波宮で使用された瓦の系譜である。均整唐草文第1類は石井廃寺に系譜が求められる。在地系である。

技法は側面調整や接合時の調整等の詳細な分析は割愛させていただくが、軒丸瓦はいずれも接合式である。軒平瓦は、重郭文軒平瓦がいずれも一枚作りであるが、重郭文第1種3・4類は桶巻き作り或いはその可能性のある個体が確認されている。均整唐草文第1類は一枚作りである。

(2) 資料調査の成果

阿波国分寺や阿波国分尼寺､石井廃寺､如意寺跡の資料調査を実施し､得られた成果について略記したい（第2･3図)。

阿波国分寺・阿波国分尼寺・石井廃寺で出土した複弁蓮華文第3類は、笵傷の位置が同じであることから同笵瓦と考えられる。阿波国分尼寺跡と石井廃寺の資料を比較した結果、笵傷の進行から石井廃寺→阿波国分尼寺の順序で製作されたと考えられる。しかし、胎土や焼成、製作技法が近似することから笵の新旧関係があっても工人が同一人物で大きな時間差がなく瓦生産が行われたと考えられる（第2図-1)。

阿波国分寺・阿波国分尼寺で出土する複弁蓮華文第1類は、外区珠文帯に2カ所の笵傷が認められる（第2図-1)。

阿波国分寺跡・阿波国分尼寺跡・如意寺跡で出土した複弁蓮華文第5類は、笵傷の位置が同じであることから同笵瓦と考えられる（第2図-2)。

重郭文第1類の右脇区に笵傷が認められる個体がある（第3図-2)。この個体は阿波国分寺で出土したものには傷が浅く、阿波国分尼寺で出土したものは傷が深いことが判明した。別の型式と考えられる重郭文第1類で下外区左側に笵傷が認められる個体がある（第3図-3）[(2)]。

2種類の均整唐草文軒平瓦と1種類の重郭文軒平瓦の新種が阿波国分尼寺から確認され､均整唐草文第2類･第3類、重郭文第3類と呼称する。第2類は唐草の巻が強い均整唐草文である（第4図-1)。焼成はやや軟質で製作技法は不明である。第3類は対葉花文で東大寺式軒平瓦の文様と近似した均整唐草文軒平瓦である（第4図-2)。下外区は複

線鋸歯文に近く、均整唐草文第１類の文様の一部を参考にし、作笵された可能性がある。

重郭文第３類は郭線の枠が二重で構成される軒平瓦である（第４図 -3)。

また、数値化はできなかったが、阿波国分尼寺跡では重圏文軒丸瓦よりも複弁蓮華文第 2･3 種の方が出土量が多い。

3. 阿波国分寺跡・阿波国分尼寺跡及び関連遺跡の採集資料の概要と比較

（1）資料の概要

阿波国分寺跡や阿波国分尼寺跡、これらの関連遺跡（石井廃寺、如意寺跡、下浦廃寺、内ノ御田南窯跡）からは多くの瓦が採集されている。この内、阿波国分寺跡・尼寺跡の創建期に関連する瓦類を研究成果や資料調査等で得られた成果をもとに特徴を述べたい（第５～８図)。

①阿波国分寺

１は複弁蓮華文第１種と同笵の可能性がある。しかし、この笵にある笵傷が他の資料にみられない。小片であるが、同文違笵の可能性がある。焼成が複弁蓮華文第２・３種と似る。

２は重郭文軒平瓦である。模骨痕があるため桶巻作りと考えられる。3 は重郭文第１類である。下外区左側に笵傷があるため、如意寺跡と同笵と考えられる。模骨痕があり、桶巻作りと考えられる。4 は重郭文軒平第１類である。

②阿波国分尼寺

５は重圏文軒丸第１種である。

６は阿波国分尼寺の新種である。資料調査で確認した均整唐草文第 2 類と同文と考えられる。7 は平安期と位置付けられているが、焼成具合は創建期の複弁蓮華文 2 類等の焼成に似る。

③石井廃寺

8 は複弁蓮華文第 3 類と同文の軒丸瓦である。摩滅により滅している可能性もあるが、周縁に複線鋸歯文がみられない。笵面に離れ砂を塗している。

9 は均整唐草文第 1 類と同文で祖型となる瓦と考えられる。段顎である。

④如意寺跡

10 は重郭文軒平瓦であるが、郭線が独立しており、新種の文様である。凸面は縄叩き整形で凹面は布目痕と調整 1 度がみられる。焼成はやや軟質である。11 も重郭文であるが、郭線のみの文様構成であり、新種の文様である。凸面は縄叩き整形で、凹面は布目痕と調整 1 度がみられる。焼成はやや軟質である。10 と 11 の焼成や技法が近似していることから、生産地が同一である可能性がある。

⑤下浦廃寺

12 と 13 は阿波国分寺で出土する均整唐草文第 1 類と文様が一致しているため同笵と考えられる。13 の凸面は縄叩き整形で凹面には布目痕がみられる。直線顎である。焼成は 12 と 13 ともにやや軟質である。

14 は 12・13 よりも年代が降ると考えられる軒平瓦である。窯体が付着し、硬質である。

⑥内ノ御田南窯跡

15 は阿波国分寺跡・阿波国分尼寺跡で出土する複弁蓮華文第 2 類と文様配置が同一であることから同笵と考えられる。焼成はやや軟質である。

(2) 資料の比較

既往の研究と資料調査を踏まえ。寄贈資料と発掘調査等で出土している阿波国分寺､阿波国分尼寺の瓦類､国分寺跡･尼寺跡の瓦生産に関わったと考えられる寺院（石井廃寺等）の瓦類を比較をしたい。

まず、複弁蓮華文第 3 類であるが、これまで阿波国分寺・阿波国分尼寺で出土するものと、石井廃寺で出土するものは同文と考えらてきたが、笵傷の位置が共通することから同笵であることが明らかになった。

発掘調査資料や寄贈資料に新種の軒平瓦（均整唐草文第 2・3 類）が阿波国分尼寺から出土しており、点数は少量であるが祖型となる笵から大きく崩れないことから、創建期に位置づけられる軒平瓦が増加すると考えられる。

均整唐草文第 1 類は阿波国分寺と下浦廃寺ものとが同笵であることが明らかになった。下浦廃寺は寺院説と瓦窯跡説（徳島市教委 1982）が遺跡の性格として提示されている。寄贈資料の中に瓦の年代は新しいが窯体が付着し、窯の補強材に使用したと推測される軒平瓦が採取されている（第 8 図 -14)。下浦廃寺は窯跡である可能性が推測され、阿

波国分寺の瓦類を生産した可能性があるが、窯跡と推測できる遺物は1点のみであり、今後の発掘調査で遺跡の性格を明らかにする必要がある。

阿波国分寺跡・阿波国分尼寺跡の瓦生産地は、入田瓦窯跡（内ノ御田南窯跡）で同文の瓦類が出土することから両寺院の生産地の候補地と考えられているが（岡本2015)、同笵瓦が出土していない。今回、寄贈資料の中に複弁蓮華文第2類（第8図-15）が内ノ御田南窯跡から出土しており、阿波国分寺跡・尼寺跡で出土する同種と同笵で焼成・胎土が近似することから、内ノ御田南窯跡が瓦の生産地と考えられる。また、型式が不明であるが重郭文軒平瓦も出土していることからも阿波国分寺跡・尼寺跡の生産地として考えられる。内ノ御田南瓦窯跡は注記から入田瓦窯跡の別称又はその周辺に内ノ御田南瓦窯跡と称していた未発見の窯跡があり、そこで阿波国分寺跡・阿波国分尼寺跡の瓦生産を行っていたと考えられる。

4. まとめ

型式ごとに笵傷の有無等の観察を行い、寺院間で供給時期の前後関係を明らかにすることができた。また、阿波国分寺跡・尼寺跡と同笵の瓦類が内ノ御田南瓦窯跡から出土し、生産地の一端を解明することができた。しかし、型式ごとの出土量の比較等解明すべき点は多く、今後の課題としたい。

調査に際しては以下の方々、機関に御協力を賜りました。記して感謝の意を表します。

大粟美菜、岡本治代、山下英郎、石井町教育委員会、徳島市考古資料館

＜註＞

(1)型式数は僧寺･尼寺含めている。一部の型式は阿波国分尼寺のみ出土するものもある(岡本2014)。なお､個々の型式名はこの論文による。

(2) いずれも重郭文第1類のうち1～4種の特定はできなかった。

＜引用・参考文献＞

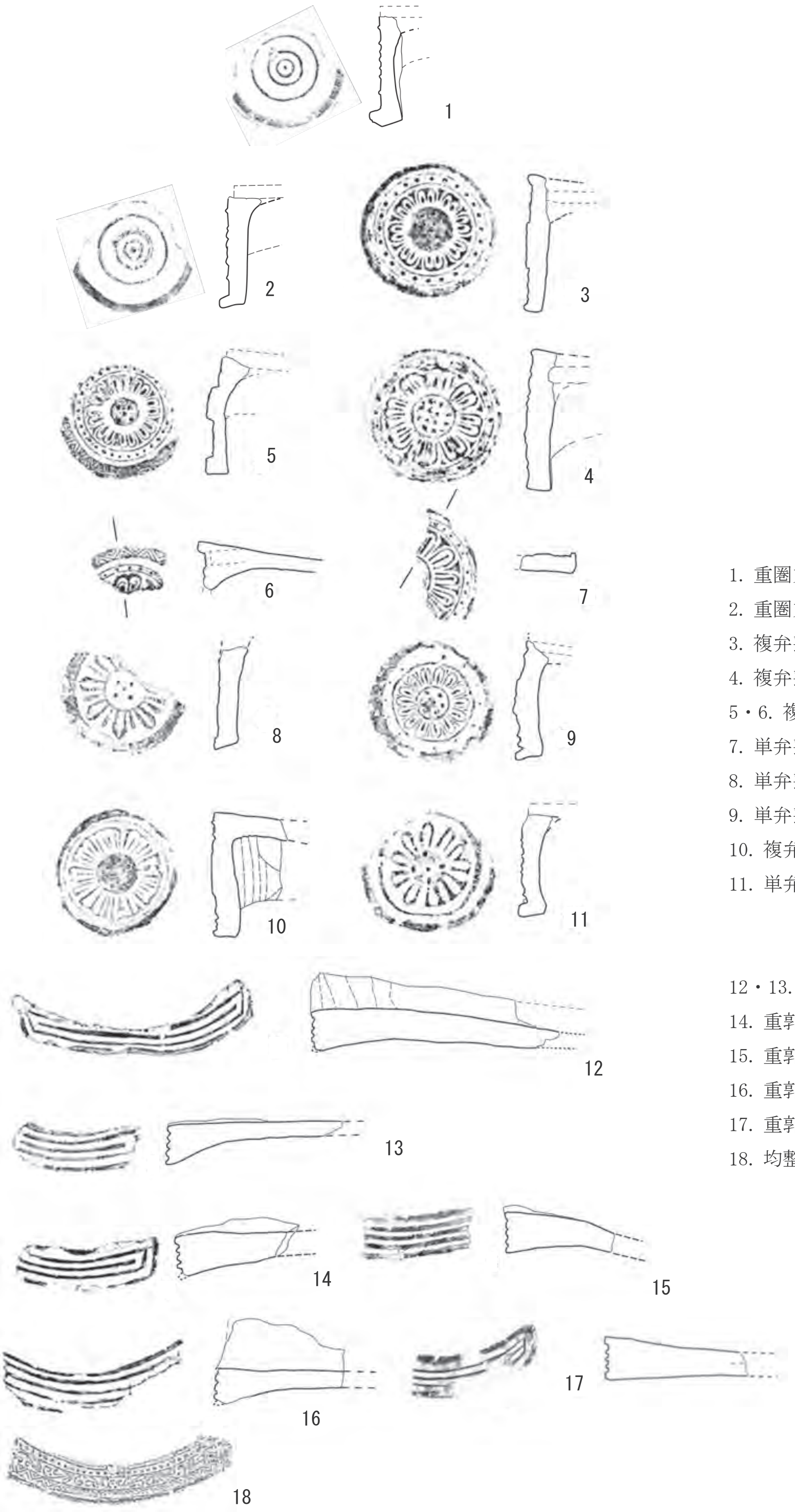
岡本治代 2014「阿波国分寺・阿波国分尼寺瓦の文様系譜と製作技法」『高知人文科学社会研究』1 高知人文社会学会

岡本治代 2015『瓦から見る古代の阿波 - 寺院と役所 - 』徳島県立博物館

亀田修一 1990「瓦からみた国分寺の造営 - 中国・四国地域 -」『考古学ジャーナル』318

徳島市教育委員会 1983『歴史時代の徳島市 - 阿波の古瓦 -』

渡邊誠 2014「四国地方の重圏文 - 重圏文軒平瓦 -」『古代瓦研究Ⅵ』奈良文化財研究所



1. 重圏文 1 種
2. 重圏文 2 種
3. 複弁蓮華文第 1 類 1 種
4. 複弁蓮華文第 2 類
5・6. 複弁蓮華文第 3 類
7. 単弁蓮華文第 3 類
8. 単弁蓮華文第 9 類
9. 単弁蓮華文第 2 類
10. 複弁蓮華文第 5 類
11. 単弁蓮華文第 10 類

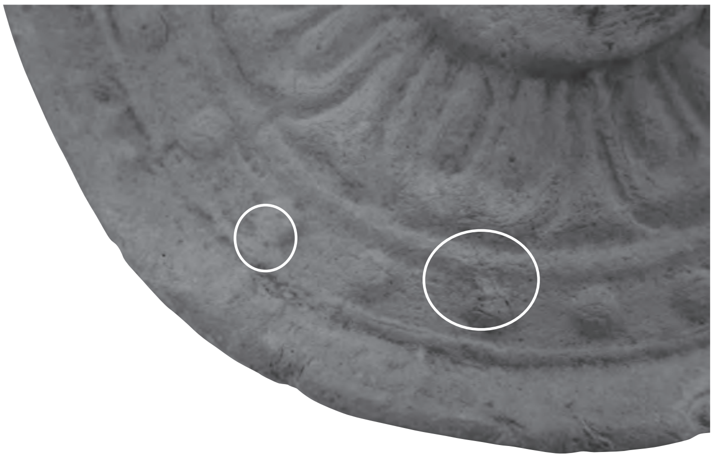
12・13. 重郭文第 1 種 1 類
14. 重郭文第 1 種 2 類
15. 重郭文第 1 種 3 類
16. 重郭文第 1 種 4 類
17. 重郭文 2 類
18. 均整唐草文第 1 類

第 1 図　阿波国分寺・尼寺出土瓦（岡本 2014 を一部改変）（S=1/8）

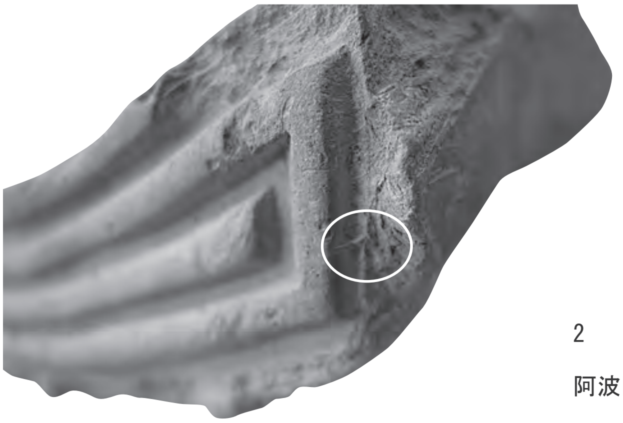
1
阿波国分尼寺跡

2
如意寺跡

第２図　笵傷の位置関係①（筆者撮影・作成）（縮尺不同）



1
阿波国分寺跡



2

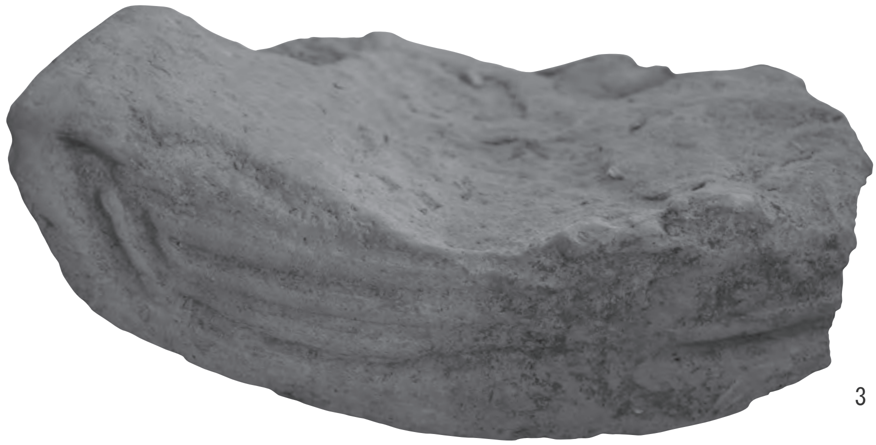
阿波国分寺跡

3
如意寺跡

第３図　笵傷の位置関係②（筆者撮影・作成）（縮尺不同）

1

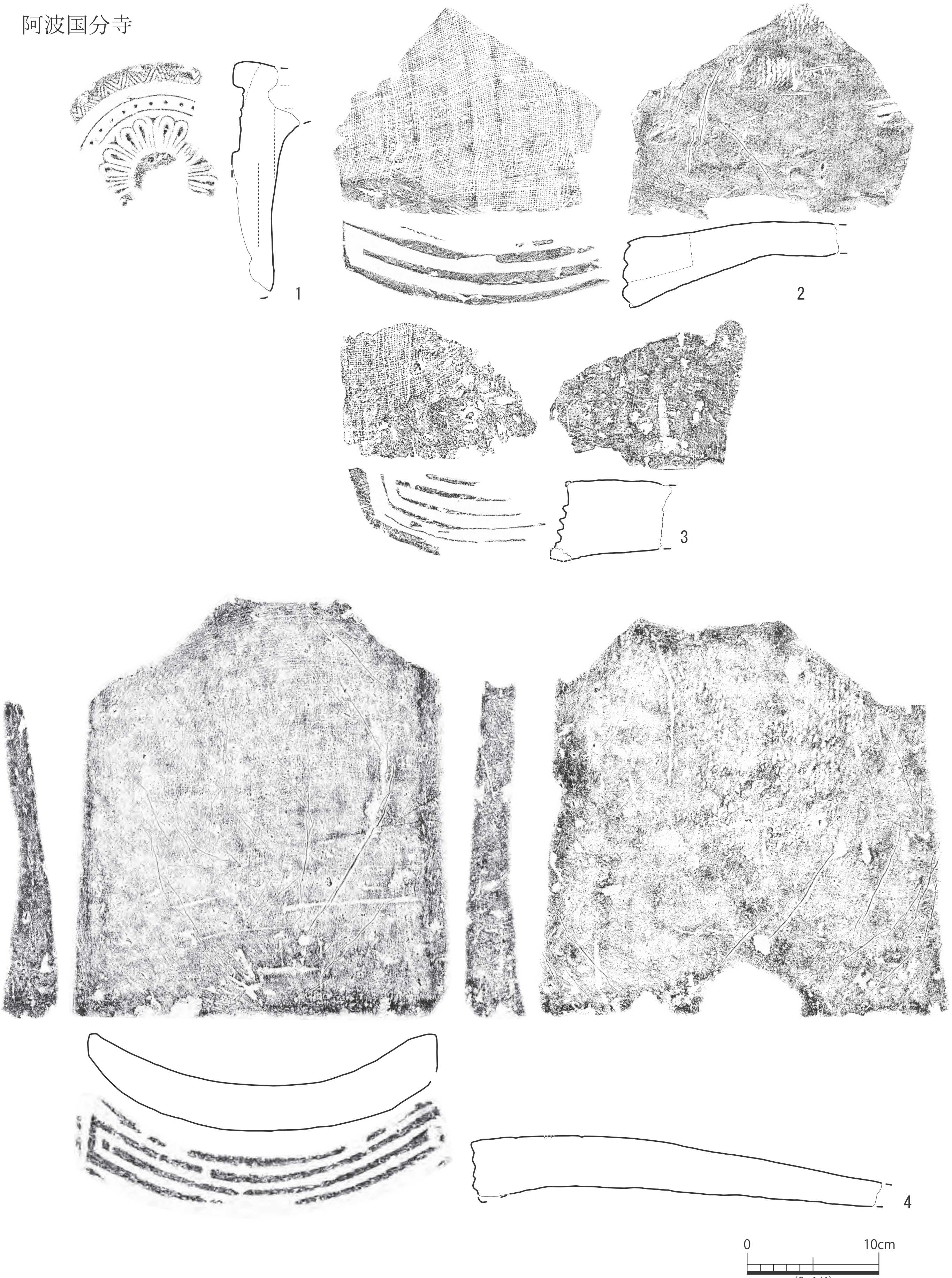
2



3

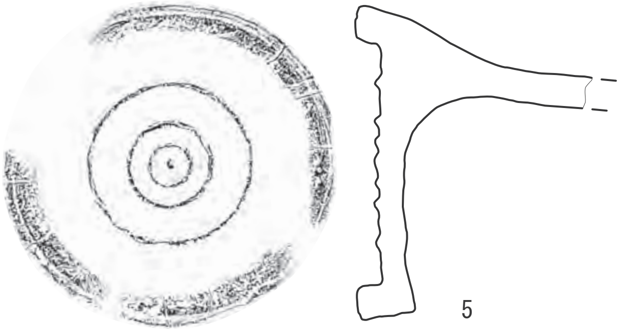
第４図　阿波国分尼寺跡出土の新種軒平瓦（筆者撮影・作成）（縮尺不同）

阿波国分寺

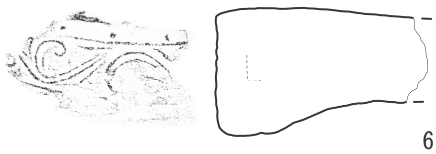


第５図　阿波国分寺跡・国分尼寺跡及び関連遺跡採集資料①（S ＝ 1/4）

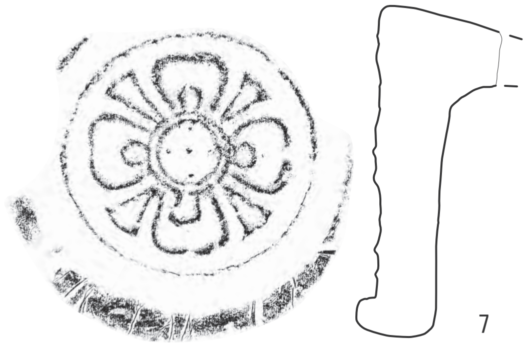
阿波国分尼寺



5

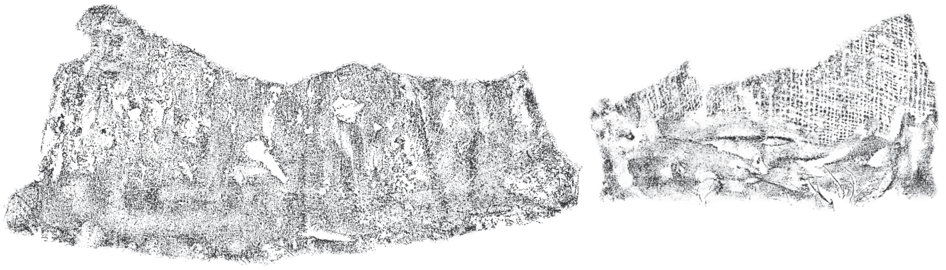


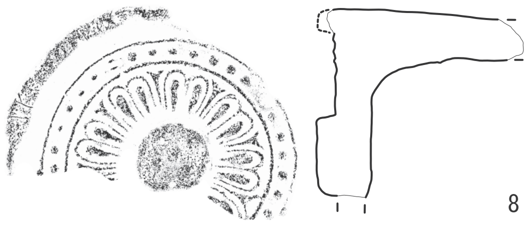
6



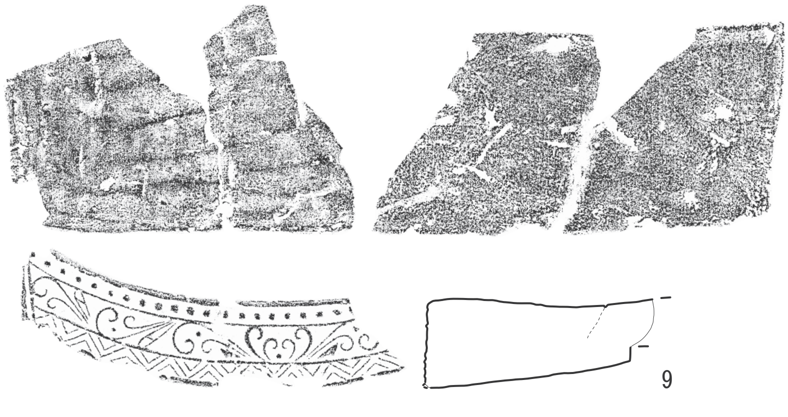
7

石井廃寺

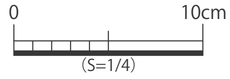




8



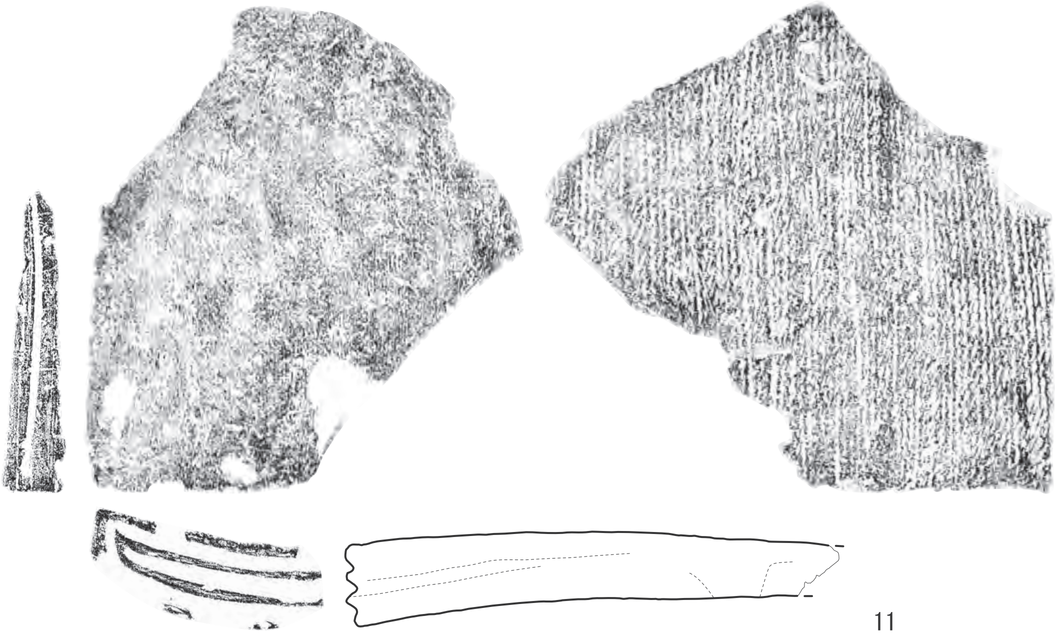
9



第 6 図　阿波国分寺跡・国分尼寺跡及び関連遺跡採集資料②（S ＝ 1/4）

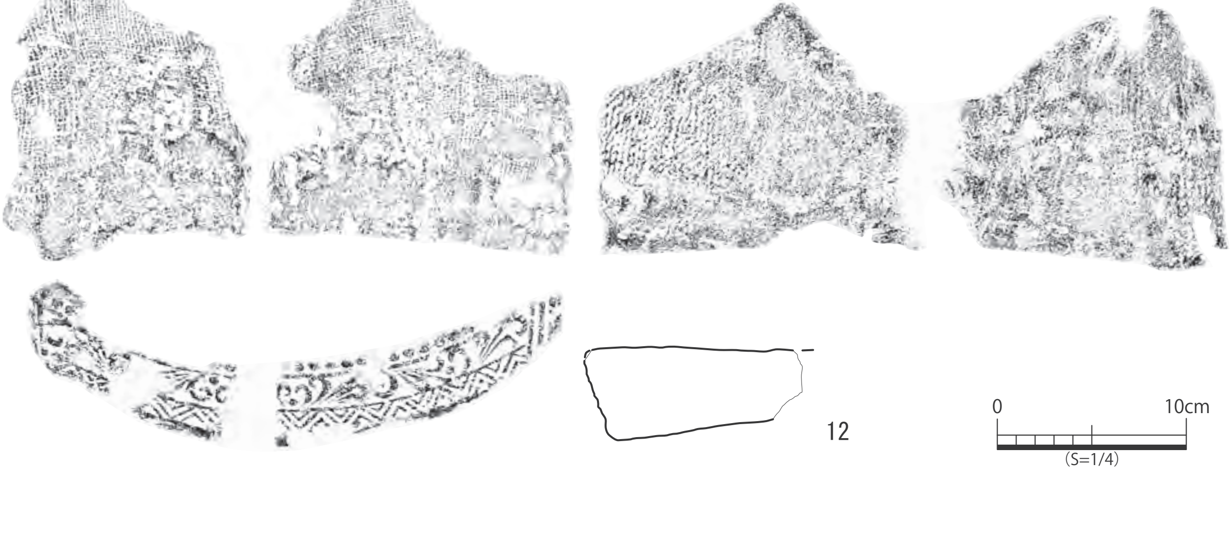
如意寺跡

10



11

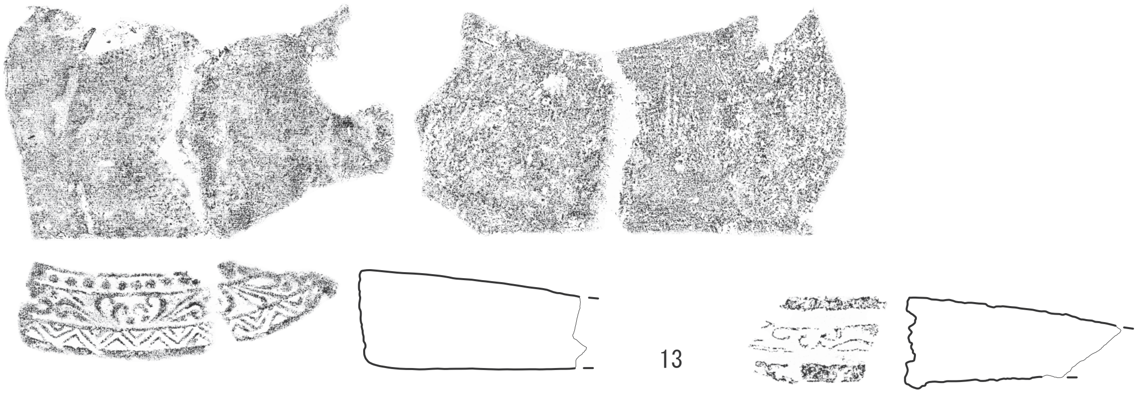
下浦廃寺（1）



12

第７図　阿波国分寺跡・国分尼寺跡及び関連遺跡採集資料③（S ＝ 1/4）

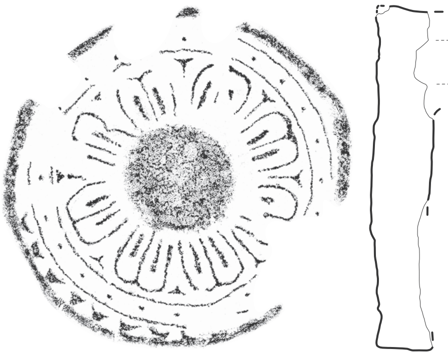
下浦廃寺 (2)



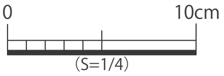
13

14 188

内ノ御田南窯跡



15



第８図　阿波国分寺跡・国分尼寺跡及び関連遺跡採集資料④（S ＝ 1/4）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ししゅう　たかまつ　だいにごう
書　　名	史集　高松　第2号
副 書 名	高松市埋蔵文化財センター活用事業紀要
巻　　次	第2集
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第233集
編著者名	香川将慶(編)・織田比呂子・狭川真一・坂本俊・田中健二・山元敏裕
編集機関	高松市教育委員会
所 在 地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目8番15号　　TEL087－839－2660
発行年月日	西暦2022年3月31日

高松市埋蔵文化財調査報告第233集
高松市埋蔵文化財センター活用事業紀要第2集

史集　高松　第2号

2022年3月31日

編　集　高松市教育委員会
　　　　高松市番町一丁目8番15号
発　行　高松市教育委員会
印　刷　(有)中央ファイリング